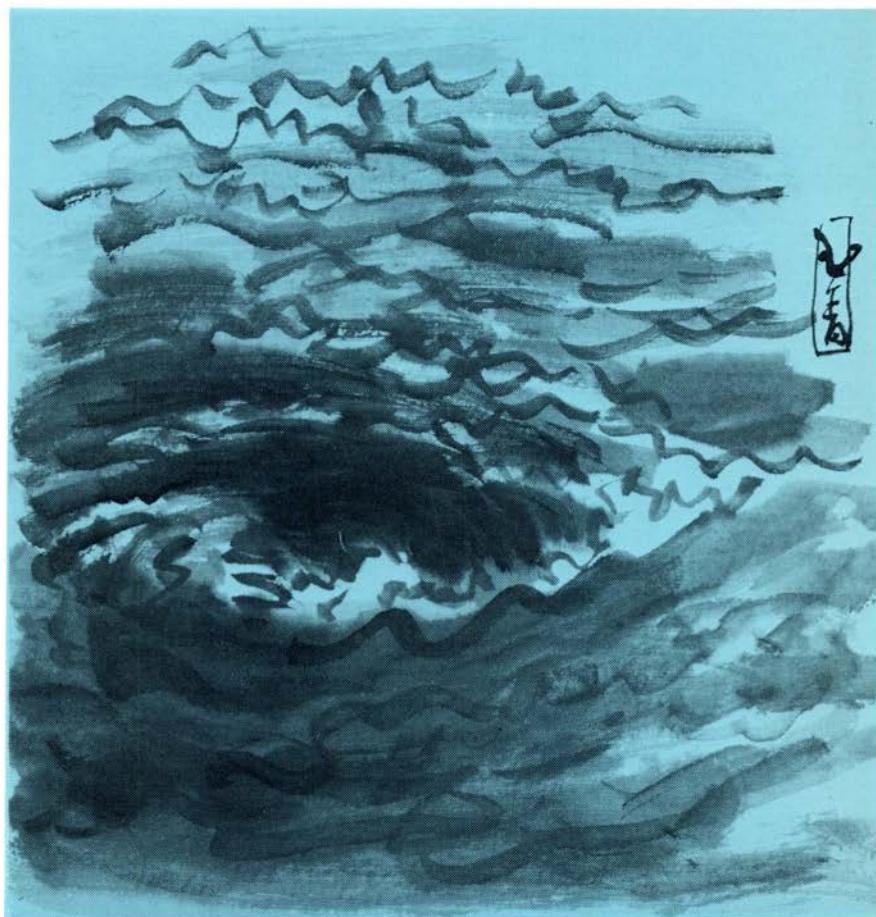


川柳塔

昭和四十一年一月一日 第三種郵便物認可
昭和五十四年三月二十五日印刷
昭和五十四年四月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷 六二三号



日川協加盟

No. 623

四月号

老人国

意に添わぬ握手も金にまかれたり
間の抜けた顔でこけしの歯切れよき
八方破れ片鱗はちらと見せておく
借りて来た言葉で譲らぬ腹が出来
暖冬異変首尾整なわぬお水とり

日本は、この30年間に男女とも20年以上寿命が延びた。ほぼ世界一の長寿国、老人国と呼ばれるようになった。日本医事新報に、花田二徳さんの一言放談という欄があるが、その先月号に次のことが載っている。『この老人国だという考え、老人が増えたとする見方は、従来の固定観念で年齢を区分するからである。人生を例えは、乳幼児期、少年期、青年期、壮年期、老年期と区切るとして、人生50年が75年に延びたら、その延びた25年を各年齢期に配分すれば、老年期だけが増えたことにはならない。成人式を25歳にするか、老年を75歳以上にするとかにすれば、老人国と呼ばなくてすむことだろう。延びた分を全部古い考えでの老年に持つて来るから老人国になるのだ』と。これは面白い説であると思う。花田さんも書いているように、現実が同じことなら、老人国などより明朗な名前の方がよい。才気煥発は、必ずしも若い年齢層だけに特有のものでないからである。

中島生々庵

~~~~~

川柳塔四月号

座右の句

俺に似よ俺に似るなと子を思い

(路郎)

私の句

母たてる妻で吾が家の灯がぬくい

保西岳詩

## 川柳塔 四月号 目次

題字・中島生々庵・表紙直原玉青

老人国

中島生々庵 (1)

私の念願

小西無鬼 (2)

誹風柳多留廿五篇研究

(二十四)

(28)

入江勇・清博美・八木敬一・西原亮・青木迷朗  
紀内恒久・鈴木黄・室山三柳・岡田甫

川柳塔 (同人作品)

若本多久志選 (4)

水煙抄

川村好郎選 (34)

柳名・雅号発生の由来 (川柳太平記①)

東野大八 (25)

秀句鑑賞 (同人吟)

月原宵明 (27)

(水煙抄)

谷垣史好 (43)

愛染帖

橘高薫風選 (44)

53年度・各地柳壇賞決定

若本多久志 (55)

第26回大萬川柳大会

(48)

## 私の念願

小西無鬼

十二月号の戸田古方氏の御意見に、私も同感のうちに、二月号、長野文庫氏の「売れる川柳に」に双手を挙げた。

川柳雑誌の昔、毎号川柳と漫画があり、路郎先生の短評も添えてあったように思う。

古川柳に還れと云う事ではないが、一番多く売れる週刊誌、月刊に至るまで漫画で埋まっている今日、誌格を落さない佳句で川柳とはの意識を強調さす。

老齡化の現代、川柳の若年化も必要であろう。廿年余り前に某中学に大西と云う先生が居て、川柳に就いて一度話せの依頼で、一日先生の形で下手な話をした。其の後数回、生徒達の作品の句選を依頼された。以来その校区に婦人会許りでなく、一般の住民の方々にも川柳熱が高まり、川柳ささやま句会に入会する人も大分出て来た。

前記中学時代の生徒で、今は一子の母になつて居る娘は、句会に出席すれば、選句を委かす一人となっている。



今日の川柳をどう思うか……………蘭幸・道夫・鎮彦…(30)

一分間の柳論……………高橋鬼焼…(33)

書評・会瀬の青藍……………香川酔々…(47)

西出一栄さんの想い出……………西田柳宏子…(56)

初歩教室……………不二田一三夫…(52)

大萬川柳「油」……………本田恵二朗…(54)

柳界展望……………川村好郎選…(58)

本社三月句会……………(庸佑・整理)…(59)

各地柳壇(佳句地10選)……………藤田軒太樓選…(63)

「すすく」……………不二田一三夫選…(50)

一路集「新顔」……………若宮武雄選…(50)

「転期」……………大鶴喜由選…(51)

編集後記……………(一三夫・葉子)…(69)

座右の句

友達の居ている前で叱られる

私の句

誇らない主人を代弁するさつき

(小松園)

横地雅風



昭和四十五年水上郡柏原にもob大学が出来水上、多紀両郡の老人会員より生徒募集あり、五十二年から多紀にも分校的でかんしょ学園設置され、初年より趣味講座も設けられ川柳の講座担当を委嘱され今日に至っているが、これら老人達も、更に句会に入会し、川柳塔の誌友となって居る人も大分ある。然し老人達である。変化激しい時代に将来を—と思うと子供学生達へのPRが先着すべきでなからうか。

生々庵主幹を始め常任理事、理事と日本随一のスタッフを揃える我々の川柳塔誌は、何処かのように営利主義誌ではない。同人、誌友共に幹部諸氏に尊敬と深甚の敬意を表すると共に事務局の御苦労には頭が下がる。

路郎先生の説かれた川柳の社会化の普及の爲にも、川柳人の若返りが必要ではないか？いや老齡化の今日、老人福祉を云々言うのではない。主幹の云われる母乳栄養が必要でないかと思うのである。

思つままを下手に書いたが、本社に重責を負わす考えはない。我々全員で我が川柳塔の発展を祈念しよう。



## 若本多久志選

倉敷市 稲田豊作

甚六を磨く砥石が見つからぬ

十字架と恋は背負うて重いもの

老母の肩叩いて足りる里帰り

子も孫も息災かしわ手冴えて鳴る

家裁出てから続篇を書く夫婦

ふところ手宿命論者によく似合う

松江府 柳楽鶴丸

馬鹿にはなれず馬鹿がうらやまし

オッケーと愛らしい返事

恥かいてかいても足りず柳画かく

バス停の事故安全な場所がない

三ヶ目にやっと屈いた寝正月

新宮市 大矢十郎

顔役を並べて初春のローカル紙

お金では済まぬと金の要る話

似た者の器量へ貰い受けが来る

級友の資金カンパという搔爬

安売りの字は下手なほど安く見え

大阪府 有信 新之助

こつこつと小石を積んだ晩成碑

這いあがる獅子にはなれぬ子の自殺

間引きせぬ人間小粒になるばかり

宝くじ買わぬ気骨は持ち合わせ

喧嘩だけは飽きぬ夫婦の迎春譜

倉敷市 藤井春日

日展へ出す意気込みのベレー帽

化粧する目尻の皺が淋しゆうて

平安朝かくもありしか雛飾る

蛇皮線の音色哀愁誘う島

道問えば女美し京訛り

尼崎市 黒川紫香

隠居所のぬくもり筆を舐め乍ら

十円を拾うと寒い道になる

横向いて定期は軽くあしらわれ  
汚れてるのれんでうまいラーメン屋  
前世の罪を背負うて化粧する

高槻市

若柳潮花

音のない夜の空間が恐しい  
夢もたぬひとにも燃えた過去があり  
野面吹く風がきびしい音で舞い  
ボールペン時には泣かす嘘も書く  
縁談のことまで家訓ふれていず

西宮市

藤村メ女

夢を追う風船が飛ぶ雲の上  
お勝手の窓から明ける妻の朝  
ご冗談でしようと女軽く逃げ  
追伸に添えて心を送られる  
見送りもなく傷心の夜を発つ

守口市

野呂右近

消化せぬ嘘まだ今日も胃にもたれ  
せねばせぬで事済む休日週二日  
憎み合うようけたたまし猫の恋  
向き合った目も活き活きと進む手話  
どの風にも揺れて柳は詩となり

和歌山市

若宮武雄

地蔵さんの丸さへすがる葛かずら  
おやしそっくり仁王さんへ陰の口  
傷つけず戻ってきた朝の靴

福豆は身に棲む鬼に気付かない  
老梅の謙虚に咲いている匂い

八尾市

内海幸生

遺書にさえ真実盛れぬ世となりぬ  
雑草の詩堂々と詠むや君  
条件が良いから善人だと思ふ  
ふり出しへ戻れば元の風でなし  
雑草にランクされてた気がつけば

大阪市

那須鎮彦

手さぐりの道合掌があるばかり  
信じ合う事が友情だと思ひ  
みかんむく爪は幸せ色に染め  
こらえたら声が出そうな涙なり  
短気でも切れぬ絆を持っている

倉敷市

野田素身郎

海峡の夜霧悪魔の吐く息か  
惜敗の夜は寝酒が倍になる  
「ところにより雨」の日に雨の村を行く  
課長補佐叱られ役も買って出る  
妻子留守こんなに広い六畳間

青森市

工藤甲吉

気が弱くなつて懺悔の日が続き  
目に見えぬ糸にあやつられて生きる  
この世からあの世までも歩く足  
思い出は亡妻と探した貸間机

おかしくもないのを笑うむずかしさ

和歌山市

津田与史

老梅もまだ衰えぬ香を放つ

一間だけあれば事足る日々となり

冬の海不気味な色で暮れてゆく

水仙にさえ笑われている私

朗報が二月の風を押し返えず

和歌山市

内芝としよ

手をつなぐ家族へ大きい夢が湧く

豆まきで中々こたえぬ鬼ばかり

晩年の花に歴史が生きている

花活けて女は四季の彩に満ち

想い出が消える故里立派すぎ

平田市

久家代仕男

浅漬の幽音に喜寿のまだ達者

尋ね人冷えこむ駅の告知板

金を追う生活詩情に遠くいる

望郷の貌を疾風の雲に乗せ

金策の足駄に重い雪の傘

鳥取市

河村日満

大山がぐつと寄り身に見える晴れ

風すでに風紋を生むあたたかさ

病院へ勤めるように通う老い

孫と解く方程式へ若返えり

いのちある限り奉仕に燃やす老い

岡山県 嘉数千代香

片チビの靴が庶民の誇りもつ

陽に貧富なく洗濯を白く干す

石ひとつ拾えば石にも陽のぬくみ

炎にもなれず老いの火抱いている

余生など知らず生活の鞭が鳴る

庭の木の一枝ごとに妻の愛

せのびしたかがとを味方にねらわれる

あきらめたときから運がこちらむく

ばい捨てのすいから拾う 子が見てる

盲導犬ちよこんと青を待っている

友の死に自信の崩れる音を聞く

万病に通ずる一病得て生きる

吾が為の祈りへ厳しい原爆碑

母親を亡くした女は欺けぬ

子の頬を叩いた手にある痛み

感激の薄れがこわい会わずおく

一途なる愛を抱きて花ひらく

みのりあるスタートの今日梅かおる

日なたぼこ「狂ってないか」と自問する

苦悩の水準低いなと思ひ

苦悩の水準低いなと思ひ

苦悩の水準低いなと思ひ

苦悩の水準低いなと思ひ

倉吉市 奥谷弘朗



二三合平気で飲めるまでに癒え  
一言が云えぬ弱気を文にのせ  
がらくたの中でマニアの眼が光り  
しんがりに持ち味がでて会が沸き  
馬鹿笑いして弱点に触れさせず

大阪市 本多 柳志

切れかかる絆をつなぐ年賀状  
三面鏡へ立つのが怖い朝がある  
黙禱もあり乾盃もあり年次会  
民宿の民話へはずむ五平餅  
燭を消して母も浄土へ着いたらし(母満中陰)

米子市 林 瑞枝

火の用心の声こだまする春の冷え  
女だてら父の遺志継ぐテスト受く  
ひとときの追想窓の月が冴え  
愛そそぐ季節に花は裏切らず  
シグナルの色を映して小糠雨

米子市 八木 千代

百合匂う雨にうたれた過去見せず  
突き放す愛に気付いた女坂  
ははの掌の匂いを残す味噌の壺  
「しあわせさん」呼べばやさしく振り向いて  
はやされた過去にひきどき見失ない

母の忌よ母のドラマを温める  
大阪市 中川 滋 雀

句碑古びビルを映したあみだ池  
吸い殻が一ぱいマンガに似た思索  
履歴書と見比らべられる椅子の冷え  
良心を売るたこ焼きで親しまれ

兵庫県 遠山 可住

ふれられたくないからバラのとげを持つ  
翅もろた若鷺にある青い空  
粗品の封切れれば政治の臭いする  
くらやみになると善人背を丸め  
国宝の私語切々と続く闇

和歌山市 野村 太茂津

露の臺温い言葉を添えて来る  
ほろ苦味く故郷を憶う露の臺  
みんな開いて花芯に匂うものがなし  
経営論火を吐く女の妬心めく  
少し音痴で土の匂いが湧く小節

今治市 越智 一水

快よく心がとける母の膝  
石一つすえる庭師の茶一ふく  
たがやせば土がもの言う土の色  
年輪のしわ美しい日向ぼこ  
やわらかい障子の影よ冬の陽よ

喜寿過ぎて未だに余暇を賜われず  
追慕にも亡母ほど亡父は出てこない  
宝塚市 傍島 静馬

すらすらと学童弔詞読んでのけ  
待合室看護婦好みの週刊誌  
舌鼓打って美味いとは云わぬ

島根県

梶

みどり

階段をななめに上る女の線  
ふところに包んだ愚痴を月にあげ  
身を包む思い出きれいな詩となる  
娘の晴着手がきの梅の花が浮く  
山陰の女の姿に雪が舞う

桜井市

岩

本

雀踊子

何もかも知ってる父の持つ無口  
隙のある後姿の人間味  
生き甲斐に敵も味方もいてくれる  
鬼灯の赤さへ庵主の目がきれい  
父のない二十才の春をかばう母

今治市

月

原

宵明

六十のトレパン長生きしたいから  
百姓に日曜があり米余る  
胎動をしかと覚えて毛糸編む  
哀歎を語ってチンチン電車消え  
捨てられた意地は立派に産むという

竹原市

山

内

静水

ジnkスにさからい五度の干支迎え  
潮先へ恐さを知らぬ稚魚の群  
光るもの光らせ噂気にしない

エプロンの白目出度い灯をはじく  
もう一人の私は雅号に支えられ

竹原市

古

谷

節

夫

生きている証を趣味に綴じてあり  
見送ってそれからまゆ毛描くゆとり  
思い出のページをカメラ喋りだし  
定年の朝涙なぞ流すまい  
如月の星空にある温かみ

鳥取県

林

露

杖

雑草のいのち舗道を裂いて伸び  
ほろ苦く独り酌む夜の路のとう  
占いを信じ本心曲げている  
愛満つる刹那をよぎる影一つ  
米寿なお姑という角を持ち

島根県

小

砂

白

汀

野ネズミの糧どんぐりよ実るべし  
声もなく流す泪よ流れ星  
生きている証 濤打ちかえし打ち返し  
墜ちるまで弱音は吐かぬ蟬の意地  
突き放す父の言葉はあたたかし

八尾市

大

路

美

幸

善人の多情多恨は赦される  
信じてる子が居る黙って靴を履く  
焼肉の匂いが憎い胃の痛み  
妻の居る夜具にやすらぎ色がある

散つてなお誇りくずさぬ落ち椿

島根県

堀江芳子

大阪市 金井文秋

ちびてきた白杖心も血も通う

そこからは言えぬ夫婦だから言えぬ

泣きべそをかけば老後が重くなる

食べ馴れた茶碗恋しい旅二日

辛かったあの日を生きてきた合掌

島根県

堀江正朗

竹原市 小島蘭幸

差し向い見えぬ苦勞もなく座り

僕と子の間に妻のいる平和

制限をされて美味さを増した酒

音だけで生きた喜び深く掘る

お茶を注ぐ音が倅世話かけ

米子市

増田竹馬

八尾市 香川酔々

オルゴール思い出の人の音で鳴り

百足這う足の運びをじっと見る

運ばれたお膳一べつ値踏みする

暖冬に急かされ盆梅咲いてくれ

モヤモヤへ机の位置を替えて見る

宇部市

平田実男

八尾市 高橋夕花

目元まで刑事私服になりきれず

神主の肩身が狭まい二浪の子

血圧をごまかしてまで欲しい酒

も一人の僕を互いに持ち合せ

突き離す愛を無情と思うた日

松原市 北野久子

愚痴聞いてもらい味方を得た気持

無駄口をたたくに距離のあるお人

雑談の話題を一つ貰つとく

経験を蓄え出番待つゆとり

主旨はよくわからぬままに署名する

胎動に妻の明るい顔がある

譲られた父のラッパがまだ鳴らぬ

ジンスの金縛りから逃げられぬ

ジーパンのヒップ逆立ちしたくなる

なによりも重い家族という重さ

誤解なお解けず重たく坂下る

祭から祭へ香具師の半生記

石の塔崩す魅力を持つ女

水掛けの不動に春の日柔かく

花吹雪花の一字が襟につき

年頃へひと味ちがう母となり

恩師から敬語をもらうクラス会

ぬれ衣を畳んだままで春になり

倅せな女でいたい桜餅

古木すら春になるのを拒まない

音の無い孤独を生かす楽しさよ

嬉しさを隠しきれずにいる鏡

黄昏は旅の女を主婦にする

さりげない素振りに詮索つきまとい

何はともあれ夫も写経してくれる

大阪市

河野君子

鏡の中で時の流れが早くなる

悩みの種尽きず福豆炒っている

如月の壺の中なる自閉症

泳いでも泳いでも夫の掌の窪で

物干しの指先あたりで春が舞う

東広島市

高橋鬼焼

矢じるしへ逆う朝のちびた靴

絵葉書のとおりには眠っている

もう消せぬ罪が仮面を重くする

妻を書く明日の詩へ夢をつめ

時計まく朝が淋しいまだ無職

藤井寺市

西 いわを

新学期波長の違う人と組む

身上に残る虚飾を剥いでゆく

重ね着をされてお地蔵春を待つ

流動物に酒も仲間に入るかな

花は良し蕾のうちの花が好き

松江市

恒松町紅

憂国の一つに自殺記事がある

アルコールに凡夫は弱い影をもち

いい知恵を凡夫はコップ酒に借り

嘘のない男に平凡な陽が沈む

横丁を女が急ぐ冬の街

八尾市

納糸葉

つむじ風不意にあなたを見失う

とまどいの掌に残るアメジスト

天国へ少うし近いビル五階

昇給の話に遠いカレー皿

定位置にあなたが居る日の安らぎよ

堺市

羽田一扇

帰り待つ耳へ雨音高くなる

歩調もう妊婦となった妻と連れ

作業着の汚れ取れないシミも有る

一日の疲れは枕選ばない

壊せない家庭があつて絡む指

八尾市

高杉鬼遊

み仏の魅力ゆたかな耳と逢う

することがあつても街は黄昏れる

青ければ哀しみ深し人の海

色事もそこそこ好きな意気地なし

合格は人ごとながら耳によし

富田林市

板尾岳人

冬のない富田林に山がある

冬積んで夜汽車が母をおんぶする



冬のない冬に樹木はあくびする

暖冬の一樹一樹が雪想う

父と母金剛山へ来る噂

大阪市 大坂 形 水

イラン動乱トイレットペーパーが動機づく

襲名をテレビだけでは飽き足らず

喪のひとへ詰問調のインタビュ

春闘へ経営者側として当たる

薬けなす薬嫌いの馴染み医者

大阪市 不二田 一三夫

親類中薄情者にして自殺

呵々大笑貧乏人は絵にならず

弱肉強食 生涯弱肉で終りそう

故郷のない女 泣き癖ついていた

結局はシラノ・ド・ベルジュラックの恋でした

鳥取市 両川 洋 々

百葉の長ですわたしに酒があり

上野駅別離のドラマに飽いて暮れ

造船の街へ不況が腰を据え

汗まみれの男をノルマ追いまくり

七尾市 松 高 秀 峰

初夢は総裁選に勝ってさめ

もう一度エトが廻れば首になる

公約と浮世の嘘にいつか馴れ

三十年勤めた印を重く押し

熊野市 坪 田 冬 花

同窓会名刺小さく泣いている

金で生き金で滅びる世を笑い

梅の神恋を結んで知らぬ顔

云い分は七分三分で親に負け

大阪市 太 田 良 子

老境を迎えますます赤が好き

犠牲者も一時代だけで忘れられ

胸襟を開けばそんな事かいな

暗い記事ばかり載ってる冬の朝

大阪市 欄 蘭

十二月の商鬼百円玉の掴み取り

水溜り飛び越す余力まだ残り

高卒浪人自衛隊でもと考える

左手でうつかり金を渡したり(スラバヤにて)

名古屋市 大 林 曲 手

黄楊の櫛おんなの性を哀します

片親の育ちで道の端をゆく

佃煮のように煮詰めぬ母の味

御一行様へ苦笑の夫婦旅

藤井寺市 児 島 与 呂 志

言い訳に負けて四角い胸になる

神様も欠伸 のりとまだ続く

ランニングせつかく燃えてた冬の雨

山茶花ぼろぼろ冬の雨みじめ

大阪市

神田秀峰

刻まれた碑文こころにかみしめる

秋晴れへ金木犀の香が流れ

この国土我安住の地を探し

エリートの落目もろくも記事に載り

島根県

西村早苗

獅子舞いの囃いしさか屠蘇を召し

左前土蔵へ出入りする古物

ひじだこのない畳屋が畳敷き

戸を叩く吹雪 雪女かも知れぬ

鳥取県

鈴木村諷子

靴下が右とひだりの足となり

金婚のしつかり妻を抱いてやる

奥山の桜一本これにあり

足跡をわたしの地図に書き貯める

福原市

岩井本蔭椿

病んで知る妻の母性愛

胸張って裏口組も卒業し

微風にも裾が気になる淑女にて

家風とは水と油の嫁が来る

倉敷市

水粉千翁

子に見上げられていたとは苦笑い

又金に見離されてる力瘤

茶に座る夫婦精一杯生きる

まわり道せめてわたしの知恵でした

(前号訂正—新年へはしゃぐ老いの悲しさよ)

貝塚市 行天千代

枯葉同士話し合ってる吹き溜り

冬日向墓地のひと時気が和む

いち早く離婚嗅ぎつけ週刊誌

貧乏神鬼といっしょにたたき出し

鳥取市 有田とし江

弱い眼の心がすぎる薬師さま (奈良・母子旅)

念じてる仏へ心の豊かなる

千体の仏へ静かに眼を閉じる

二月堂のうどん親子を温める

姫路市 大原葉香

かたつむり自分の過去を欺かず

後へは飛べない鳶の目らんらんと

家具整理くつきり目立つ畳やけ

ガムをかむあごは情性で動いてる

竹原市 鈴木かつ子

愚痴聞いて聞かせて夫婦丸く老い

ひざの孫あやす茶の間の灯が丸い

明けの鐘つく人思ふ雪の朝

感情のもつれ悲しい灯に坐わり

出雲市 原独仙

アンコール煽てられてるとも知らず

アルバイトぐらいで世相掴めない

雪女出番ないのを嘆く空

男皆けものに見てもバフ叩く

島根県 飯塚虎秋

約束を果して戻るいい月夜

大阪市 津守柳伸

夕映えの海の男に愚痴はなし

世に馴れて嘘を分析するゆとり

寅歳と言うに睨みの利かぬ父

米子市 石垣花子

御車の御通り堀にへばりつき

吉日に運び出す荷が場所を取り

罪深き子の死なげぬ母があり

悲しみへカメラ非情なポーズさせ

伊丹市 桧谷寿馬

一滴が臉を温いものにする

仲の良い夫婦で歌う枯れすき

パースデーケーキ神様にもあげる

0才用の本も売っている本屋

川西市 戸田古方

きつちりと楷書で書いてちごている

まぐろみたいに毛布でさげて担架まで

じつと見てたらボクが一番スカタンや

しゃがんでみたらちつとはぬくなって

西宮市 島居百酒

元朝の国旗戦に征った家

地下街の酔が違っていた出口

期するもの抱いて炬燵の長い日々

緋の袴脱げばディスコの床で舞い

ローソクが微笑んでいる客がいる

ガス噴射待つ気構えのネグリジエ

ゆらゆらとゆれる柳にあるけじめ

音楽に酔えるゆとりもある老女

和歌山市 松原寿子

菜の花の海に抱かれて蝶の恋

黒髪が貴方へなびく日の別れ

積み上げた愛を崩さぬ風もある

つもの思慕ここに響く毬となる

和泉市 西岡洛醉

ひび割れの手から温もり消えおんな

血圧も忘れとまり木に酒の唄

雑踏に流されて見る春の午後

春うらら五十一歳まだ飛べる

大和郡山市 森田カズエ

情熱の詩を書くペンのよい滑べり

定積へ妻は小さな夢を盛り

定年のどこから入る隙間風

高だかと孫手を挙げる横断路

神戸市 仲 どんたく

ルンペンの学識新聞の時事を読み

ルーペで指紋辿っている独り者

産み終えし鮭のごとくに定年後

そのヒツプ オートクチュール手古ずらせ

姫路市 植村 客遊子

ライバルもやっぱり今年古稀だった

福寿草弘法さんの加護に咲く

売約の赤札の名を見て廻る

買うて来てつんどくと云う参考書

米子市 佐伯 越子

ぼろぼろの過去を繕う糸もなし

いろり辺を囲むふる里夢樂し

ふる里の民話の詠りにある余韻

水子地藏合掌の女の瞳かなし

大阪市 河井 庸佑

古き佳き時代を偲び古都に住む

職人の眼物さしほど確か

山の辺の道もクルマがほこり立て

糸切れた凧に夫をたとえられ

東大阪市 斎藤 三十四

お互に楽しい嘘ならいいだろう

常識を少しゆるめて妥協する

ファイトのある男の顎は張っている

定退に鎖が解けた背伸びする

富田林市 岩田 美代

つぶやきを集めて見れば皆孤独

嘘ころころ仁丹の息吐きながら

昨日も今日も脚色があり瘦せている

楽しいことありそで障子の白を貼る

堺市 高橋 千万子

踏込めば天分もいる芸の道

青春の頬を入試に削られる

落し主拾い主ほど善意なし

夢のない夫で稼ぎを酒にかえ

竹原市 時広 一路

石垣の草よ互いに負けまいぞ

何一つ喋らぬ百度石である

不発弾抱いて哀しい愛を知る

貝殻に春を知らせる波が寄せ

岡山市 川端 柳子

真新らのお札が祝の折目つけ

歩調とる夫に無理が多すぎる

向い風男冥利の面構え

善人は早死一つの碑は語る

大阪市 西出 一栄

### 遺句

寒月の冴えに背骨が凍ててくる

鶯の初音に野仏目を細め

寒行の太鼓に上絃の月冴える

クラス名簿鬼籍の友をかぞえいる

大田市 藤田 軒太楼

人生の浮沈がかもす涅槃の境

母子して遺影を守り夢捨てず



性来の美貌をなぜに塗りたてる  
這い這いが出来て一家のマスコット

呉市 横田英詩

合格通知父母に安堵のお茶があり

言い訳をした日男は寝つかれず

勝ち知らぬ男石蹴る癖がつき

その日暮らし辞書に休日などが無い

大阪市 神夏磯道子

走馬燈になって痛みが消えて行く

行く水に逆えぬのを知った負け

母へ出す便りは安心さすことばかり

愛に負けた日変身試みる

倉敷市 小幡里風

開病へまぶしそうなり裸婦の像

成人式大人の涙知っている

神様も頼りにならぬ願ひごと

柱時計油のきれた音で鳴り

奈良市 宮口笛生

養護学校知恵一ぱいの歌うたい

蟹させる窓墨色の日本海

暖冬異変人間様も狂いそう

酔っている方が二次会狩りたてる

笠岡市 松本忠三

波風を立てず年功序列にし

冗談で済ますにしては棘があり

片腕が歩のいいほうへ動きかけ  
転職が肩に食い込む菜っ葉服

鳥取市 岸本無人

ターミナル翔べない鳥が歩かされ

秒刻む靴音朝の交差点

にらんでる浮子へ蜻蛉が来て休み

生臭い焚き火で明ける魚市場

米子市 小西雄々

太るのを罪悪感のように言う

賽銭の小銭も用意して出掛け

卵だく鶴はさっそく記事となり

観光のコースにぼっくり寺も入れ

島根県 錦織文子

南天の意地 地に伏したまま雪に耐え

洗濯機うならせて朝の色にする

けとばされた小石そのまんまの顔で坐る

狂い咲き花の浮気を見てしまふ

倉敷市 田垣方大

ガム噛んで強烈に識知らされる

まだ顔が優先してる法治国

耳打ちの言葉に進路変えさされ

魂が化石になって掘り出され

諫早市 原田明春

副業を持って停年まつ余裕

高官の汚職へ雪の白すぎる

良心の呵責が金に恵ぐまれず  
良き夫たらん五十を平でおり

島根県 大森孝華

北風の死角で雑草に早い春  
道草も良し人生の旅長い

松山市 谷真風

髪染める虚勢に春があざ笑う

読書フト岐路にあらたな灯がともしり

感涙へ過去の足跡かみしめる

酔うて吐くうさよだいに折りたたみ

愛媛県 渡辺暁童

春の彼岸の ゆたかなる墓地

こだまのわかれ かくかそうよう

日にも月にも 祈り忘れる

昭和色なる 漁火の色

仙台市 川村映輝

子供部屋造って親から離れゆき

専売公社禁煙の街へけちをつけ

半年間安定所に養なわれ

若い気で居るが座席は譲らない

唐津市 新岡回天子

金婚がもうくる苦楽夢のうち

右左標石国道の隅に生き

信仰とおさい銭とは別のもの

名案に金がからんで行きつまる

玉野市 小谷仙山

菜葉服明日へ流す今日の汗  
六十の手習い桜の狂い咲き

映画館出てからつづく御堂筋  
かけ替えて秘境は春待つかずらばし

泉大津市 村上春巳

南極を科学茶の間へ連れて来る  
南極の笑顔苦勞を語らない  
一本の釘を信じて棟上げる  
食い置きが出来たらと思う舌鼓

大阪市 室谷徹舟

壺ずらり並べて壺に語りかけ  
人間不信そんな或る日の詩集読む  
離婚歴女を強いものにする  
七くせの一つ素晴らしいくせをもつ

鳥取県 川崎秋女

一匙の塩が生きてるかくし味  
ひとり棲む女疑問符つきまとい  
男ある日自信の矢を放つ  
大阪に籍あり地下街又迷い

松原市 玉置重人

落人の語らくなるか瀬がさわぐ  
落人の血をひく老婆の背のまるく

岡山県 浜野奇童

一喝をして立つ父の眼は許し  
ご好意の傘忘れさす陽が覗き  
駅前へ帰って昼にする遠慮  
抱き上げてやっぱり我が子という重さ

岡山県 出原敬一

夫婦愛枯れた頭を刈っている  
亡父が使いしかけらへ心通わせる  
露の味鮎追いし友すでに亡く  
山の子は那岐の山脈父母として

西宮市 杉浦婦美子

子に賭けた月日の中に埋もれる  
忘れるという特赦もあって老楽し  
捨て切つて女枯野を走り抜け  
血圧をなだめすかして冬を逃げ

枚方市 宮川珠笑

処分する土地がまだあり立候補  
再考を指示し腹案秘む課長  
笛の音が心とおなじ乱れみせ  
死ぬほどの愛がレターにだけ残り

大阪府 黒田眞砂

南天の朱が彩どる冬の庭  
脇息がいつか並段の父の古い

振り返る闇に女の業火炎ゆ  
せめてもの抵抗無言の紅を引く

兵庫縣 河原みのる

銀行にゆく用のない気の易さ  
急かす遅れずエレベーター素直なり  
ひい孫へいくさの翳りふとよぎり  
稲作よりほかにない春が来た

和歌山県 西山幸

良心が無事息災と思う自負  
銃眼は母の祈りで塞がれる  
くたびれた靴に劣等感晒す  
さまよえる群れを見ている販売機

鳥取市 小林由多香

真白いハンカチ孫も朝を出る  
電話帳繰つてメンバーやつとでき  
マスクして講義の部屋のを寒し  
背広にも魚屋臭い持つて来る

桜井市 河合茂雄

三界に家の無いのが男かも  
三面鏡覗いて女は欲を問う  
香車とて横にとびたい日の苦惱  
忘却と諦らめ切れぬ風便り

寝屋川市 宮尾あいき

誰に見せる訳でも無いに紅をさす  
満月に老のひがみをさとされる

墓參の朝心得顔に雨上る  
夫の墓とぬかずく私を陽がくるむ

寝屋川市 柴田 恵美子

いいこともあるサとコーヒーで帰らされ  
すべり込みの言い訳みじめになるばかり

男だけに敷かれてる社のレール

早春賦浜辺に未知の波が寄せ

大阪市 横地 雅風

失業へ妻と思案の灯が消せず

多い目の秤へにつこり市場籠

マンションの売出し喘息出る年金

初孫へ旗も振りたい呱呱の声

岡山県 竹内 翁童

無礼打ちのように左遷の辞令

窓際に座る出勤の定期券

残り火をかきたて祖母の闘病記

社の危機を伝える朝刊に起こされる

羽曳野市 塩満 敏

一人娘非売の札をつけておこ

銀杏髷服を着て出る国技館

先生といわれる人にもアキレス腱

会釈する娘の家がしのばれる

美弥市 安平次 弘道

四捨五入四と五気まずい仲にする

花束に愛があるとは限らない

ゴキブリも快適冷暖房完備  
ポスターの美女に逢えそう城下町

呉市 林野 甦光

ポチの目を或夜寂しくする灯かけ

晩成の机に手品の本がある

変化する歴史見ている回り椅子

検問所の近くで外す黒目鏡

島根県 藤井 明朗

形見分けたんすの底に眠らせる

女ひとりの扉の隙へ影うごく

道徳のうすれ少年の夢縮む

へそくりの小銭あちこち忘れられ

鳥取県 金川 満春

ドラフトは明治生れにわからない

信仰に妻の先達恙がなし

満ち足りた日々感謝する古稀の春

此処迄を無事に來た旅急ぐまい

竹原市 三宅 不朽

寒の水いささか墓碑へためらいぬ

南無阿弥陀南無阿弥陀仏と我を曲げず

ななお前あなたと麦を踏む夕日

俊寛の泪か岩を噛む怒濤

姫路市 梅谿庵 不醉

一寸でもいい年調を待つ世帯

晴々とケーキにメスを今日の幸

法を説く法主が法に裁かれる  
はからずもなどと利いてる袖の下

鳥取市 佐々木 静 泉

ただ生きて呉れと点滴見つめたり(父入院)

握った手に家へ帰りたいと言ふ

百姓に生きた無骨の手をさする

目顔で物言うのも母にだけ解り

岸和田市 島 崎 富志子

二十年夫婦もつれぬままに過ぎ

節分の豆に追われる猫の恋

新聞のA子我が子と同じ年

忘却の彼方に捨てたい過去を持つ

大阪市 西 川 誓 二

根は一つ歪んだ枝を笑えない

白紙還元と吐いた唾を飲んで

金は無愛想うちへは来てくれず

俳聖の旅を偲んだ峠道

東大阪市 崎 山 美 子

省資源歳暮も裸でたどりつき

折鶴に祈りをこめる母の指

ほんとうの自分を知っている鏡

出稼のつらさこけしと共にたえ

大阪市 文 川 一 念

ブランコの好きな男に嘘がある

ボーイから冷たくマナーを聞かされる

知恵の輪と遊び孤独でいる男  
改める時期が二十才と云う祝い

東大阪市 文 川 野 生

拗ねたのは一羽もいない千羽鶴

友情のかけらを男置いてゆき

正直に見える眼鏡を外しとく

考えているのはロダンだけでない

京都市 松 川 杜 的

経理屋と分る顔がいる事務机

風紋の神秘を消してハイヒール

サングラス噂などに負けませぬ

片面のチラシはメモにとっておく

大阪市 柳 原 静 香

もう六十まだ六十と紅を引く

夫の背風よけにして女坂

荒れた手を庇う手袋娘がくれる

家計簿へ猫の予算も取っておき

大阪市 江 城 修 史

生きる汗たしかな妻の新聞く

身構える暮しは貧しさ知りつくし

はるかなる夢子に賭けて老いの坂

子が走るレールの果てを信じたい

東大阪市 竹 中 綾 女

見るだけのつもりくずれる着物展

沈丁花咲き急ぐかに紅濃くす



婚約の孫の瞳日に光増す  
手造りの茶碗贈られ心満つ

松江市 中川 晃 男

イメージが合わぬ雪のない出雲  
言うだけを言わせてみんな聞き流し  
息子笑いながら母さんに嘘をつき  
置いて去んだオモチャいつまた来る孫か

竹原市 森 井 菁 居

寡婦ポツリ酔えば戦のことに触れ  
過去はふりむかぬ男の菜っ葉服  
トップ讓つても苦しい男坂  
ランドセル買った日からの早起きよ（長男入学）

大阪市 山 川 阿 茶

南極の花火をテレビで見る炬燵  
飼われてる鶯あわれ梅も見ず  
入学の願ひ北野へ親子づれ  
湯豆腐が待つてくれる帰路いそぐ

寝屋川市 高 田 博 泉

傷心に海の青さが氣にくわぬ  
口づけの瞬間目覚し割って入り  
借金が平氣になってから落日  
さようならしてきた空に澄んだ月

大阪市 小 出 智 子

幸せすぎて女の皺が増す  
球根を買い中年に夢があり

聞き流す耳がときどき疼きだす  
偶然に遇える氣もする春の風

兵庫県 北 山 越 山

暖冬で不足は雪のない若さ  
抵抗を女は涙からはじめ  
裏の裏読んだ悲劇が裁かれる  
貫禄が出来て苦勞は話さない

下関市 国 弘 半 休 門

夜を更かし骨まで道後の湯で温め  
色即是空一休さんは虹の橋  
不快指数を灰皿でもみ消す  
働きもせず祭日の代休

松江市 小 林 孤 呂 二

泰山のごとくありたい妻と子へ  
美味しいときはほど良い顔になる  
追いつかれ越され五十はマイペース  
結び目のゆるんだような朝もある

岡山市 白 岩 文 衛

俗物が一番役に立ってくれ  
華道展生きてる花だけ見て帰り  
僕に似た男ドラマの端に出る  
八十年神に仕えて神となり（悼横山大人）

羽曳野市 榎 本 吐 来

梅園の粹へ関東煮が臭い  
旅の気楽さ嘘が真のように出る

又ひとつ若い生命の消えた記事  
天命を待つ子へコップ注いでやる (大学入試)

西宮市 若林 草 右

レース編指の太いが氣にならず  
それぞれの生活を見せてごみを捨て  
出勤のついでにごみ捨てたのまれる  
父ちゃんが髯づら見せる昭和基地

鳥取県 福田 保 子

裏切りが許せぬ若さ持てあまし  
メスの手へ祈る視線がつきささり  
子の非行叱る言葉を撰る披れ  
女ぐせ酒ぐせ調停までもつれ

大東市 土 岐 トク子

美しいことは素直な思いやり  
藤色の好きな寡婦です夢いっぱい  
夢にみた亡夫の連れは見ず知らず  
感謝する心が老いの辛救う

鳥取県 清 水 一 保

汚されて雪の白さを自覚する  
寒行をのどかにしごく春日和  
銀行に縁なし幸せ畑に立ち

岡山県 直 原 七面山

拘りが語尾を染め  
あり過ぎて困るエゴ  
謎めいたマダムの目

大阪市 神 谷 凡九郎

また一人婿と呼ぶ名の息子です  
みんな歩ゆんだ道だヨ一、二、一、二、元気にネ  
夫婦という名で出発点に立つ

柳井市 弘 津 柳 慶

退院へ庭のダリヤの色も冴え  
ローカル線自慢話がまだ続き  
男子出産オジイチャンのうれしい目

東大阪市 市 場 没食子

金婚へあと一年の梅だより  
洋風にまぜり点々奴だこ  
一区切つけて司会者コマーシャル

松江市 梅 本 登美也

逢い別れ人のさだめの果しなく  
雪つぶて憎い男を的にする  
果しなき迷路聖書の頁繰る

大阪市 北 勝 美

伸び過ぎた麦へ四温のうらみごと  
ポケットの指でお昼を考える  
考古学墓誌それぞれにある動き

京都市 都 倉 求 芽

晴着やつと着つけられたら雨となり  
見とれてた振袖が煙草吸うシヨック  
桐箱を開ける感触母を聴く

大阪市 本 間 満津子

孤独でも氣樂でええなアとも思い  
齒ブラシが困るみれんな齒が一本  
おふくろまでインスタントの味に馴れ

松江市 岡崎祥月

情勢が益々日本を追いつめる  
おとなしい羊が荒れる記事ばかり  
マスコミの影響がある離婚沙汰

岸和田市 清野こう

人の目を引く水仙のつつましき  
ほどほどにせよと疲れた胃が痛む  
憎悪の目あびてすすくあわだち草

大阪市 西森花村

おけいこに縫ったゆかたは父が着る  
子のネクタイ締めて梅見の老人会  
指輪には変らぬ愛をささげます

倉敷市 斎藤通風

親子では渡れぬものよ虹の橋  
連休にかぎり友なく電話なし  
恋疲れ猫は膝へと一休み

京都市 山本規不風

落選を覚悟で候補に立った年  
氣の短かい指がダンスを踊ってる  
裏替えた紋服二代目を包む

大阪市 藤田頂留子

ゆずったら結構 此の次降りますの

同じ指十本なのに上手下手  
あの手この手財布やんわりくすぐられ

神戸市 中村ゆきを

知恵おくれ春もどこかで子が生れ  
靴紐をしめて仕事の鬼になる  
言訳を探すネクタイ解きながら

兵庫県 大江秋月

両親にはぐれた雀が庭に来る  
マニキュアの女に夢が大き過ぎ  
味見して妻の好みの味にする

鳥取県 森田布堂

人格でない肩書に頭下げ  
行きずりの人の情にふれる旅  
十代の悩みも聞かず共稼ぎ

和歌山市 桑原道夫

少年に動詞の活用踊り出す  
誘蛾灯シャンデリアよりあたたかし  
ペタペタと頬搏つ雨の人通り

浜田 久米雄

理屈には合わない嘘を言うてのけ  
年寄りの腰が伸びないままに春  
幕の内老人会を我慢させ  
晩酌の雫を振ればにらまれる  
飲み足りぬところは年に押さえられ

本田 恵二朗

雪まばら休耕田は無表情

八十年の曲折秘めた座りだこ

ちび筆で老いた海図を塗り換える

希いついに叶うて破魔弓を飾り

古稀達者せんべ布団が性に合い

菊 沢 小松園

三菱銀行北畠支店天下に鳴りびびき

ぶっ切りの血のしたたりを君知らず

眼をそらす女は罪を意識する

救世軍信じることの難しさ

水子地蔵のぐるりも春の花が咲き

橘 高 薫 風

悼 近江砂人民

彼の世の川を如何に渡らす英国型紳士

別るるや黄色い花の多い季

海の風 宮島蟬の越天楽

夢を見た夢の終りの落椿

落椿 情炎未だこちら向く

尼 緑之助

独仙・湖楽両氏喜寿(二句)

新春やよし喜寿ステツプにしてはねる

立春と今更言えぬ梅満開

我が家にも春は駆け足草の色

冷戦にハツパをかけるすきま風

旗樹てて戦さもストも売り出しも

川 村 好 郎

今日もまたお世話になります掌を合せ

ぎこちない言葉の中に愛があり

封切れば女が負けになるレター

明日も逢えるさわやかな別れ

云いたいことやめ一気にビール干す

伊 藤 茶 仏

断わりの電話にかまけ風邪に伏す

円満にまとまりました深呼吸吸

法案をよそに野党は検事めき

決裁にもう用のない名刺刷る

医者通いしてまで廻るお人好し

正 本 水 客

玉青先生の襖絵を洲本千福寺に観る

大襖絵に立てば渦潮寄せてくる

千鳥とぶとぶ墨絵の渦が音になる

白雪を描く墨いろ風が湧く

趣味の人あふれ菊の間松の間牡丹の間

絵ごころを誘われ心に句をえがく

西 尾 栗

信濃路より越後路へ

商魂は藤村焼酎駒子餅

何にでも効く温泉へ目をつむり

温泉の窓の雪は冷めたいものでなし

つぎたしの出湯の廊下に折る氷柱

若 本 多久志

この齡になつて時間が惜しくなり  
朝起きて読書時間をひねり出し  
前頭葉細胞不老と聞く強味  
ぽっくり寺行かんでもいい持病あり  
ハンドルはまだ自信ある旅枕

★

同人吟の選をお引受けて——いくら古い柳歴があつても、生活経験が豊富でも、齡七十を越せば時代感覚の点では若い人に及ばないものです。まして凡愚の私は病後でもあり、その感が深く今回の選はご辞退を望んだのですが、主幹のお勧めもありこれを最後の選としてお引受けしました。どうぞ、一年間暖かいご理解、ご協力を賜りますようお願いいたします。 多久志

## 麻生路郎第二句碑建立

### 30周年記念句会

時 所 兼 柳  
話 題

四月二十九日(祭)  
奈良県宇陀郡室生村向瀬  
「鉄道管理局前」近鉄アベノ百貨店  
東へ北側を百米。九時三十分。

中島生々庵  
上田翠光選  
小川恒明選  
大坂形水選  
菊沢小松園選  
西尾 栗選  
「牛」  
「うれしい」  
「名」  
「光」  
「すずらん」

★昼食時れんげ畠で弁当をつかい、句会終了後、室生寺へ参拝の予定。

児島与呂志著 (美装箱入・二六七ページ)

## 川柳句集「地下鉄」

### 刊行記念句会

日時 54年6月7日(水)午後6時  
会場 金 属 会 館

南区鰻谷東之町10番地

(地下鉄堺筋線長堀橋下車東スグ)

(電話271・3935番)

兼 柳  
話 題

「足」 黒 川 紫 香  
「改札機」 児 島 与 呂 志 選  
「乗りかえ」 野 村 太 茂 津 選  
「河内弁」 西 田 柳 宏 子 選  
橘 高 薫 風 選

席 題 費 当日(二題)と選者発表(各題三句)  
千円(句集呈)

発行所・大阪市南区鰻谷中之町二〇

川 柳 塔 社

序 文 中 島 生 々 庵 頒 価 千 円  
編 集 不 二 田 一 三 夫 (送料共)



## 川柳太平記 (11)

# 柳名・雅号発生の由来

東 野 大 八

「武玉川」は寛延三年（一七五三）から安永五年（一七七二）の約二十年近くに十八篇を板行しているが、柳樽は明和二年（一七六五）から天保十年（一八三九）までの七十四年間に百六十六篇を刊行している。この二つの前句付関連本が、約百年近く継続（一部中絶期間があったにせよ）して世に残ったことは、環境が江戸期だけに驚異に価する。

このような比類のない前句付（あるいは川柳点）の続刊は、一体如何なる基盤に由来するものか、「武玉川」の慶紀逸にふれる前にその素因を究明しておくことが必要だろう。西鶴によると上方江戸三都の町人が遊芸に狂奔した契機は俳諧だとしている。そのピークは元禄期で、町人の間で俳諧・茶・花・音曲が熱狂的なまでに流行した。伊藤仁齋の堀

川塾のものの堅い道場でさえ、入門生はこれらに血道をあげていたとある。

これが享保・元文と年を経るほど遊芸への関心は過熱傾向を帯び、化政期におよぶとその遊芸の分野はとみに拡大し、義太夫・常盤津・富本・長唄から、五流の能の謡、尺八、三味線から笙・ひちりき・笛などの雅楽の世界にまで爛熟していった。

彼等のこうした遊芸熱の道程で、踏みしめていったのが、ほとんどが俳諧が基盤であった。この俳諧素養の大きな原因は、点取俳諧とそれからする景物取り（金品）にあったわけだが、いま一つの見逃してはならない傾向は俳諧には「表徳」が存在していたことにあつた。表徳とは俳名・柳号等のこの世界特有の「雅号」の意である。紀逸自らも俳諧は「点

を以って流行を極め、表徳をもって世にはびこる」と述べていることでも判る。

― 表徳をにわかに土手でつけてやり

(柳拾6)

― 俳名の無いのを遣手うれしがり

(「8」)

表徳の由緒は、遊廓の遊女が古来伝統的に用いていた「源氏名」にある。この呼称の発想は、「源氏物語」の女性群からきたといわれているが、とにかく源氏名は芸名である。遊女の源氏名は、いわゆる「さ言葉」で、廓内が里方で通用したものだが、この慣例を生じた理由は、吉原や島原の代表的太夫として、その出身は、みじめな貧家の出身である。本姓のままでは興ざめて高級商品にはなり難い。このため遊女の出自を消すための手段として光源氏をめぐる優雅な女性の名をつけ、現世を遮断し、歓楽の別世界を作り出す。いわばこの稼業の企業的知恵が生み出したものである。

芸道の世界とは、芸一途の芸のみの世界であるべきだ。遊芸の世界で心おきなきこの環境に身を置くためには、芸名こそが別世界のユートピアを現出させる。芸名さえもてば、封建的身分制の現世の「憂き世」は、直ちに

『浮世』と洒落のめすことができる。ここには、芸一つで俗世の大名や旗本も見下すことも可能で、よくいえばそこには文句なしの自己解放が約束づけられる。この近世的な人間解放のメカニズムが創案されたところに、近世芸道へ素人町人が殺到し、文化社会を形成して急速な膨張を実現したわけである。

つまり芸道の最高権威者である師匠は、弟子たちが大名、旗本、公卿、町人であれ、その見識一つで、免許状に芸名を添えて与えることができる。この免許芸名を与えられた弟子たちにとってこのことは、感銘すべきわが身の荣誉に他ならぬ。その余慶として金品による謝意が伴ってくる。ここに発生したのが江戸中期に公然と表明化した斯道の「家元」制度である。芸道の一定水準の高さを獲得する機構と論理の仕組みを活用し免許状発行権を集約的に独占する―これが家元制度の今昔の在り様ということになる。

上方、江戸の下層民衆が、遊芸諸般に精通し、高い評価とそれに伴う過分の報酬をつるという憧れの天地がある以上、このルート王志す人々が跡を絶たないのは当然である。その一因には歌舞伎名題として「河原乞食」と賤民扱いされた事例がある。しかし、それは四民の上に立つ武家階級あたりの感觸や、それ

に追従する富商連の蔑視観のみであって、それすら芸道の奥儀に到達すれば、もはや無用の蔑視として笑殺できる。そのため精進と研鑽が、逆に芸能諸般そのもののレベルアップを促し、芸能社会は一段と活況充実さを加えるという逆の作用を生み出すことになった。一体「家元」とは何か。その発詳は、武家の家族制度における本家筋の呼称からのものと、奈良・大和の大寺院の塔頭に僧侶を送り込む特権を独占した家を、家元或いは寺院と呼ぶところから出た。

これが芸能諸流の家元に転じ、今日の家元制度の発端となったが口火は茶道である。茶道藪内流五代目竹心の高弟、関竹泉の著「茶道真向翁」(享保三年―一七一八)には「千家および藪内を茶の家本と唱う」というのが元祖とある。この家本は、江戸時代では家元と二様に扱われている。後者が現在の家元に当る。茶道の唱える家本資格の定義については、ここに取りあげる暇はない。要するに流祖嫡流の純血主義的な家芸なりとしているというのが茶道の要略である。しかし、江戸も中期以降となると、そんなことは霧消した。

①家元とはあらゆる一切の免許権をもつ  
②石の性格により家元の直弟子、孫弟子また孫弟子となる者を名取制度と称する

③弟子達は家元の流儀名を与えられる  
いずれの諸芸にしろ弟子はあくまで素人である。権威ある諸流として、学ぶ方はあそび・教養・趣味である。こんなお稽古ごとの世界で元祖の藪内流茶道のような方式では後世の町人パワーの世間には通らない。第一、その宗匠や、弟子たちのあごの下が干上る。

俳諧においては、その家本格第一号が本稿第六回にも述べた貞徳の和歌三神に切紙伝授に当る理屈となるが、談林派がこれを一笑に付し、芭蕉自らも「貞徳のよだれ」と罵倒する有様となり、彼没後の俳諧ブームは世に大いにひろまった次第である。

参考までに俳諧の源氏名―つまり表徳に次いで、芸道で芸名が普及したのは、武家側の普代宗という宗派の音曲尺八の世界がそれだった。一名竹名と呼ぶ。

ともあれ俳諧の道では、流行点者が家元格を自認し、それを振り回したのが不角と蓼太であった。不角門の慶紀逸はこれに耽溺し、蓼太門の柄井川柳はこの格式に反発した。

これはこの両者の氏素姓や、生育の環境にもよるが、要はその時代の世相環境の所為といわざるを得ない。後年、川柳が狂句に陥ちたのもまた故なしとしない。

— 同人吟 —

秀句鑑賞

— 前月号から —

月原 宵明

甘言に酔えぬ女の坐りだこ

岩田 美代

中年女性の悟りにも似た哀しみ、この場合坐りだこが古風でなく、うつすらの坐りだこがお色気すら感じる、美代さんの独壇場。

課長補佐己を殺すだけ殺し

野田素子郎

課長とは親子ほど歳は違うが、課長、課長と拝個性を忘却している、最後まで課長は夢々 エリートへの反対現象がこれ。

年金で軽いのちを温める

高杉 鬼遊

「軽い」が皮肉に聞えないのは下旬の思いやりがあることと鬼遊さんの情味の一面がそこはかとなく漂っているから。やがて私もいつまでの女と思う春の傘

小出 智子

深水描くの美人画と思いきや、女の「業」と「性」を衝いた宗教的な警告でもある。

旧く。生者必滅、会者定離……。

天の声まだまだ君の席はない

黒川 紫香

紫香先生の厳しい叱咤である。将来ある人は三説四説。恐ろしい天、ある事を知るべし。虚を衝いて運のよい歩が金になり

長野 文庫

古今東西、奇襲は歴史を変えているが、金になる歩の確率は低い、世事に富む文庫氏の心憎いまでに穿った「人生観」であらう。

手助けはせぬが誤ちだけは責め

野村太茂津

損得抜きで世話を焼くのは明治、大正生、和歌山川柳を今日に至らしめた太茂津さんの世話好きの勘に障る筈、川柳塔の惑星として注目し期待する一人である。

日向ぼこ祖母美しく老い給い

山内 静水

人間の最も美しい姿であり、既に仏になりきっている尊さを受ける、真実一路の静水さんが心で詠んだ「老い給い」に頭が下がる。

日向ぼこ貧しいことは口にせず……拙句  
信号機如き人間指図され

小砂 白汀

私もそう思う、全く信号の為に歩いているようだ、でも指図を守らないと直ちに昇天する。思えば昔は良かったでせうな。

手に触れて分っただけの欲で生き

堀江 正朗

今壺坂のお二人（失礼ご免下さい）の真の句は一字一句身に沁みます。聴覚、触覚で闇

の世界を朗かに暮しておられる大悟、無我にいつも胸を打たれています。ご健吟の程を。恋すすむもう計算のない二人

川口 弘生

打算は中年の恋、金が顔出せば終り、この「計算」は広い意味を持っているようです。弘生さんは未だ若いんですね。

儲かっていますカルテに書いてない

玉置 重人

嵩まつて手垢にあせたカルテ、山に積んだカルテ、お金の事は一切書いてないが、ここから高額所得が生れる。先生読むべからず。頂上でゆっくり外す鬼の面

内海 幸生

上五中七極めてさりげなく、決め手の「鬼の面」はお見事と言いたい、勝利の快感に浸るのに「ゆっくり」が成功をした。

コルセット嵌めて自分を見失う

大原 葉香

型に嵌められた人間は不自由この上ない。私も三ヶ月の体験者である。その境涯に生きて心まで失われないよう病気に勝って下さい。表彰式すらり皆勤だけの額

横地 雅風

学校と考えよう、体育はいつも(5)、ほかに取柄はないが健康が何より、快いユーモア。よい酒になった夫の年思う

島崎富志子

喜んでよいのか悲しむべきか、世話女房はひそかに思う、ここで。飲んでほしやめてほしい酒を酌ぎの霞乃さんの句があった。



# 誹風柳多留廿五篇研究

— (二四丁) —



八 木 敬 一

415 雪の留守こたつで女房まぶくた

入江—亭主の雪見の留守に、間夫を引込みこたつにはいり、ふぐで一杯ときめこむ不埒女房。「まぶく」はフグの一種と同時に間夫にかけた。

清—賛。亭主は吉原で雪見か。

青木—同。亭主は吉原の雪見説、適。

岡田—フグは実際にフグ鍋をつつくのではなく、フグみたいに恐しい姦通を犯す意。「雪の留守」ですから、雪見と称し亭主の吉原行の留守が適解と思います。

416 隠徳をほどこすで下女い、くめん

入江—誰にも門の井戸を汲ませて陰徳をほどこすので、金まわりがいい。「陰徳すれば陽報あり」との諺。

八木—陰徳が意味深。

岡田—賛。

417 時ハ得がたし留守の内／＼

入江—「時は得難くして失ひ易し」(『史記淮陰侯伝』)の文句取り。

①女房の留守に悪友を引入れて博奕か。

②悪友どもを家に呼び集めて吉原行の相談。

③亭主が伊勢参りの留守で女房をねらっている間男。

このような句は、いずれとも決定し難い。清—文句取がねらいだから、句の意味が不明りようになるのも止むを得ないが、③説がおもしろいと思つ。

西原—いずれとも治定しないことに賛成。女房の留守と思つ。

鈴木—賛。西原氏の女房の留守の方が面白いようだ。

岡田—句調からすれば、女房の留守説が一番

入江 勇・清 博美・八木 敬一  
西原 亮・青木 迷朗・紀内 恒久  
鈴木 黄・室山 三柳・岡田 甫

つよいが、間男からすれば、亭主の留守、もつとも日数のかかる伊勢の留守の説も成り立つ。

418 雨戸にあひせんあひくろ、やきもち

入江—合栓(戸の穴に差込んで動かぬようにする栓)。合くろろ「枢」。戸の棧おとし。

亭主の遅い帰りに、やきもち女房の締め出し戦術。戸締めまりを嚴重にする。

八木—賛。『仮名手本忠臣蔵』九段目「イヤヤそれは僻言ならん。用心厳しき高師直。障子襖は皆尻ざし。雨戸に合栓合枢……」の文句取り。

岡田—文句取の発見、敬意を表す。

419 座敷らうしやれ本をかし叱られる

入江—座敷年は狂人などを閉じこめておく所だが、ここでは放蕩息子が外へ出られぬよう

嚴重に仕切つてある私設刑務所。洒落本は遊里に取材した文学。吉原での放蕩が原因で服役中の息子にこれを与えることは、いたずらに刺激し錯乱させるようなもので教育刑の意味がない。犯人はやはり母か。

座敷らう酒をのませて母ふしゆび

天元・官1

室山―賛。息子の方からすれば、

座しきらうあ、月われをほろばせり

一八・25

岡田―賛。ただし刑務所は少し大げさ。留置所ぐらいの規模。

420 下女鴨をなんにすべいと錢でとり

入江―賭け事の遊びの一つである紋付の景品に取った鴨。下女が鴨を取っても仕方がないから錢で取った。

おかみさんおめへだと鴨下けてくる

(おめへが当つたヨ)

一七・3

岡田―賛。

421 一舂分人ン三人横に行

入江―回わしを取る女郎。

一舂分身とは、一つの仏が衆生を救うために十萬世界に種々の相で現われること。觀世音菩薩は三十三身となる。

八木―賛。もとの語は「一舂分身」。女郎は人間だから「一舂分人」といった、言葉の遊

び。

青木―「川柳吉原風俗絵図」に、「嫌いな客を避けて間夫のところへこっそり行く事を、横にゆく、横にくる、横ばんをきるなどという」(石川一郎)とある。

主題句の場合は足音をしのばせて、こっそりと順次に回わしをとるの意が適と思われる。うまい事草履を横にはいて来る

傍一・42

横に行く癖が女房やまぬ也

安七・智4

室山―同。「一舂分身」は、謡曲では、「三輪」、「誓願寺」、「代主」その他に出て来る。

岡田―諸説に尽きる。

422 門松にみそをすらせるしわい奴ッ

入江―長屋の小松をぐいぐい引きぬく大屋のことか。「みそをすらせる」は、小松引きの譬であらう。「しわい奴」とは大屋のこと。

松かざり大屋根こぎにして廻り

二一・41

むぞうさなものの大屋の小松引

拾初・11

摺りこぎ代用ではない。

青木―賛。機械用語で、軸が中心線上を廻わらず、振れて回転することを「みそをする」という。摺粉木とすり鉢で味噌をする様から出た語であらう。

杭を引き抜く時、地中に埋られた部分の穴を拉げる為、杭を大きく回転させて引き抜く事があるが、主題句の「みそをすらせる」は門松を引抜くための準備工作、引倒し引廻す事をいつているのであらう。

岡田―難解句。ハッキリ治定できない。後考を待つ。

423 間男と亭主伊勢物がたりする

入江―伊勢神宮参詣の折のコキユー氏、それとは知らず、くだんの間男と土産話をする。

青木―賛。「伊勢の留守」の間男。

室山―業平の『伊勢物語』をつかったところがミソの句

岡田―賛。

424 大石のなかにかるいしひとつあり

入江―「かるいし」は足輕寺坂吉右衛門。赤穂四十七士中最低の扶持高(三兩二分、二人扶持)であつたが、大石内蔵助と同様働いて主君へ忠義をたてた。もつとも討入後、大石は吉右衛門を計画的に逃がし、浅野家などへ成功の報告をさせたという。

かるいしも一ツまちつて義をたてる

二三・23

足輕に早飛脚とはいいい見立て

五九・22

八木―賛。大石と輕石の対語。

岡田―同。



集 特 人 同  
場 登 プ ホ

今日の川柳を

どう思うか!?

竹原の小島蘭幸・和歌山の桑原道夫・東大阪の那須鎮彦諸氏に、このようなテーマで、忌憚なく自分の思っていることを吐いてもらった。あれっと思っようなことをズバリ云うあたり、若さの特権であろう。

— 編集部 —

川柳に羽織・

袴はいらぬ

川柳たけはら

小島 蘭 幸

なで手を上げての互選とし、兼題選者は、私達三人が担当しました。没句、入選句共、一句一句に短評を加えての披露にしましたが、皆さんはこの披露を実に楽しみながら聞いてくれました。拍手あり、歓声あり、ひやかしあり、又、月見句会らしく、お団子と抹茶をごちそうになりながら、最後は静水会長の総評でしめくくり、楽しい句会を後にしました。改めて、川柳の楽しさ、醍醐味を満喫させられた句会でした。

昨年の秋に、三原青年会議所有志主催の月見句会に招待されました。竹原川柳会から三名程ということなので、静水会長・文晴・私の三人が出席しました。月見句会の会場となった神社の一室には花が活けられ、野菜や果物が盛りつけられてムード満点の中で、兼題三題、席題一題に挑戦しました。席題は皆ん

さて、今日の句会、大会は何のためにあるのでしょうか。人を集め、入選句を発表し、賞品を渡して、ハイ終了。こんな句会が多過ぎると思います。これでは句会で抜けるための川柳技巧ばかり上達して、本当の意味での自分の川柳にならないのでは無いでしょうか。では、先に書いた月見句会の楽しさはいった

い何だったのでしょうか。三原青年会議所の皆さんの川柳は上手ではないけれどもそれぞれ個性があり、自由奔放に作句していました。要するに、川柳に取り組む純粋さに引き込まれたのだと思います。私は、川柳を着物にたとえるならば、普段着で良いと思うのです。川柳に羽織、袴はいらないと思いますし、ましてや、鎧・兜は必要ないと考えています。普段着の中の個性美キラリであって欲しいのです。

——そういうことを考えながら、若輩の身で失礼ですが、最近の川柳塔から、私の眼にうつった川柳に私なら短評をさせて頂きたい。これら諸先輩の句の中に、個性豊かな川柳を見ることができていると思うのです。いくつになっても女はソプラノで喋り

戸田 古方

とても明るい、おしゃべりな女性。ややもすると、耳障りな女の高い声を「ソプラノで喋り」とは、何という心憎い表現でしょうか。作者のやさしい人柄が想像されます。

―バチンコ屋父に自由な椅子があり

高杉 鬼遊

本当は、バチンコ屋にも自由な椅子というのはないのでしょうか。自分の打ちたい台に先客がいたりして。しかし、この父親にしてみればバチンコ屋は心の逃避であり、やすらぎの場所なのでしょう。淋しいですね。

―百面相でもしまひよ生きねばなりません

神谷凡九郎

落ちるところまで落ちた男の、心意気のようなものを感じます。しかし、ちっとも暗さが無い。ひょうひょうとした作風を買いたいと思います。

―さりげなく季節見舞を出しておく

西山 幸

いったい、どんな事が書いてあるのでしょうか。想像するだけで楽しくなってきました。

―羅漢の顔みたいな土工のにぎりめし

不二田二三夫

目を閉じて、この句を語んじてみると、本当に羅漢の顔が浮かんでくるよう。不思議。

★

―最近私は締切り間際にならないと川柳が

出来なくなりました。せっぱつまった状態で作句するから、良い句ができるはずがありません。こんなことではいけないのだが……と思っていたところへ、編集部からのこの原稿の依頼。自分にはつばをかけるつもりで書きました。これを機会に、個性豊かな、いのちある句を作りたいものです。

## 「俺に似よ」について

川柳わかやま

### 桑原道夫

「最近、川柳をやってるんです」

「僕は、全然、川柳知らんなあ」

ある高校の国語教師（三十歳くらい）と話した時のことである。

「麻生路郎という人に、こんな句があるんです。俺に似よ、俺に似るなと。子を思い」

「ワッハッハハ……」

―俺に似よ俺に似るなと子を思い

路郎の代表作の一つである。この句には、笑いをひき起こす要素があったのだ。

「似る」という語は、互いの対象が、ほんと

うは違うのだ、という意識をもって使う語である。だから「顔が似ている」「仕草が似ている」などのように、部分的な面について言うことが多い。「何から何までAはBに似ている」という場合も、やはり、違うという意識をもっているのだ。

「俺」とはふつつ、同等・目下に対して使う語である。また、卑俗な語である。「俺に似よ」とは、生な人間としての自分に似よ、ということであろう。もちろん「俺」と「おまえ」は違うのだという意識をもっている。そのために、強い感情表現になっている。「俺に似よ」に対して「俺に似るな」となっている。この二つの表現は、同じ重さではない。どうやら、路郎は「俺」に似てはしかったらしい。命令と禁止とは同じ重さではないのである。例として「歩け」と「歩くな」を比べてみよう。「歩くな」と言われると、なぜか歩きなくなる。「歩け」と言われると、素直に歩きなくなるが、これは、「歩くな」が、「歩くな」で「歩く」というイメージが残っているためである。

「俺に似よ俺に似るな」は、感情的な表現である。同じ語をくり返しているのが気持がよい。それに対して「子を思い」は理性的である。ここに、笑いの原因があったのだ。

しかし、川柳家はこの句を笑わなかった。同じ語のくり返しや、○音の多用による巧み

な表現に酔ってしまっていたのである。

国文学解釈と鑑賞（S28・七月）の大村沙華という人の「現代に於ける川柳の意義」からの引用である。「二、現代川柳の諸傾向と其の批判」と題して、当時の川柳を詩性川柳と柳多留調に分けて批判している。路郎のこの句が、水府の句などと並んで批判されている。「之等の例句に表現された内容は、庶民の人情の機微、血肉の愛情、市井の生計、巷の雄感等の表白が多数を占め、柳多留の系譜を踏んでいる事は間違いない。但し古川柳の卓越句に比ぶれば、何れも甚だ水増しした低調を免がれず、酷評するならば詩藻の貧を繰り返していたのでは、化政期狂句の時代に突入する危険さである。」

この大村沙華という人は、風刺を含んだ詩としての川柳を評価しているからか、人情を詠んだ句などには冷たい。

しかし、この路郎の句に関しては、僕も、いい評価を下せない。「俺に似よ俺に似るな」に対して「子を思い」が、ストンと理に落ちてしまつて、拙いのである。「子を思い」があまりにも常識的なのである。路郎の個性が感じられないのである。そのために永遠性を持たない句となつてしまつた。父権が弱くなつたとされる今日の状況では、この句の内容自体が笑いの対象にされ得るのである。

日常生活や人情の機微などを詠むのが、悪

いのではない。時代・社会等との関係を自分はどう考えているかということが、句に現われてこなければいけないのである。

そして心配なのは、川柳塔の川柳が、今日を詠んでいるかどうかと言ふことだ。人情を詠むにしても、過去の人情を詠んでいるのが多い気がする。もつと心配なのは、過去の人情に浸ることによつて、過去に抱かれている人がいるのではないかということだ。もちろん、句の上でのことであるが。

いま、川柳塔は、麻生路郎の句の科学的・客観的な研究を必要とする時期に来ていると思う。それをしなければ、伝統を守っていると思つても、路郎の句の弱点ともなり得る所ばかり真似をする危険性があるからである。

### 本格派は新しい言葉愛用し

### 革新派は古い言葉を愛用する

東大阪川柳同好会

那須鎮彦

私のような川柳をはじめて間の無い人間に今日の川柳をどう思ふ等と言う題を与えられても、コナせるかどうか？ せいじつぱい頑

張つてみようと思います。

今、川柳界でいつも取り沙汰されるのが、本格派川柳と革新派川柳との対比であるが、編集部の一三夫氏に失礼であるが、氏の眼を仁王に変えたり、釈迦に変えたりするのが本格派で、革新派でないとする事は出来ないと思ふのです。本格派は新しい言葉を愛用し、革新派は古い言葉を愛用する傾向があるのです。

私の手元に、浜田儀一から貰つた同人句集「川柳塔」があります。儀一は歳取つてから青春を取り戻したように、身体がくたくたになるまで働いて居るようで、電話で聞く声は元氣そのもの、同僚の仕事が捗らぬ時、メモへ励ましの川柳をさらさらと

懸命の努力見てくれ 神仏

儀一

おそらく、川柳が、歳取つてからの儀一を支えているものと思つている。同僚を励ますより、己れ自身を励ます句のようにみえる。だから、句会に出なくても、川柳によつて精神的やすらぎを持てる人は、まだまだ沢山居る事と思ふのである。時間の許せる限り、句会へ出席して貰えるよう。その近い方々が誘ひ掛けて下されば、きつと、行つて見ようと云う気になるんじゃないかなと思つたりする。ちなみに、その句を貰つた同僚は、それから、成績が上がつているそうです。

扱て、「川柳塔」の中から、本格川柳、革



新川柳のどちらに属するかは、皆様の判断におまかせして、代表的な諸先輩の句、あるいは尊敬する先生方の句を連記してみようと思います。

— 白痴美に似てエプロンの閑な午後 生々庵

— この島のかくれクルスに耐えし墓 栗

— 五月雨の竹のリズムも嵯峨のもの 好郎

— 夕日観音もみじの色が息をする 水客

— 念仏申し候えど婆婆がよく 多久志

— 都会の夜セロリは母の香に似たり 薰風

— 既製服私は並の人の香を出す 小松園

— 日本画の色で大和の朝が来る 万的

— 山を抱く雲ふんわりと母の膝 岳人

— ゆるしがたいポーズのひとつ懐手 美代

— 簾とは人間四角に坐られ 雀踊子

— 救われないのち父の座へ戻り 牧人

— 鬼の面かぶって鬼になる強さ 酔々

— もろもろの生命を喰うて人いきる 凡九郎

— かけひきは四つに組んでからにする 天笑

— ライターのいのちを削る火がきれい

— 蟻の列俺もなんとか稼がねば 十止庵

— 冗談ならすらら言える口なのに 肖二

— 選外というペンだこを頼りにし 一栄

— 「旅人」から 一三夫

— ふるくとも僕には仁義礼智信 路郎先生

以上、二十句を連記させて頂きましたが、原稿制限がありますので、三十人の好きな川柳

家をより出し、その中から、その人となりが一番わかりやすい句だけを、引き出したのですが、ここで一つ勉強させて頂いた事があります。それは、なんと自己満足だけに終る句の多い事と言う事です。

「谷町」に形水さんの直筆でサインを貰う。

— 谷町は丁稚車にきつい坂 形水

— この句は、氏を代表する句であって、誰にでも、感銘を与えることが出来る。

今日の川柳をどう思う。と言う題を、平たく考えると、上手でなくても、自分の句を作ろうと言う気になって来る。すると、本格も革新もなく、川柳だけが残る。そんな気がするこの頃です。

川柳を作る人々は、沢山居ますが、その人

## 一分間の柳論

川柳とは何んであろう。人間の詩であり、生活の詩でもあり、言葉の遊びでもあるといろいろな答が返ってくる。私の机の上には常に一冊の辞書がある。俳句から川柳の魅力にひかされ、きびしい川柳の道を歩んできしたが、今になって言えることは、言葉をたくさん知ることだと思えます。さまざまな言葉こそ川柳上達の近道だとも言える。そのためにも私は毎日辞書を開く辞書から得たさまざまな

々が川柳を見直す時、川柳の根は張り、新芽がどんどん伸びることを思います。

今日の川柳は、明日の川柳とし、きれいな水をそそぎ、愛情を持って育てた時、きっと次代の川柳も、同じきれいな水をまき、愛情をそそぐでしょう。

川柳を愛するのは簡単でも、育てるのはむづかしい。それは、趣味の域を出ることの出来ない糧が、それを重くする。先生方の苦労が、わかるような気がします。

今からもう一度、自分の句が作れますように諸先生には恐れ入りますが、御指導下さいますよう、又、諸先輩には、勉強出来る機会を作って頂きますようにお願い致します。

## 高橋 鬼焼

まな言葉が人間の詩になる、新しい川柳とはただむづかしい言葉を並べた詩がりっぱな川柳とは言えない。毎日の生活の中から新しい文化を見つけ心を引きつける詩こそりっぱな川柳ではないでしょうか？ 私は今日も辞書をめくる。新しい言葉をおぼえるためにもほろほろになるまでめくる。川柳には頂上はない新しい文化をみつめながら命のあるかぎり一步一步、皆さまと共に前進して行きます。

# 水煙抄

川村好郎選

岸和田市 古野 ひで

新調の靴が謀叛を企てる

尼崎市 中谷 利美

茜さす雲海の果て浄土かも  
冬の雲親のない子の吐息かも  
とんがった心おさえて花と居る  
お墓参り亡母の風をひとり抱く  
護摩の火に女の葉が燃えたぎり

福山市 桑田 静子

私生活どうであらうと好きな歌手  
注文をつけて片肌脱いでやり  
泣けば済むそれを女は知っている  
来るものが来たでは遅い善後策  
なけ無しの財布と知らず子がねだり

柏原市 小谷 葉子

新年も忘年会も知らぬへら  
早生れ損したように拾う齡  
肘ついた女の姿勢の哀しさよ  
哀しみの涙は心に降る小雪  
君想うスキ間へ針が指を突き

和歌山市 福本 英子

すこしだけ賢い人の前歩く  
正直に答えて哀しくなる女  
弾む毬うつすら春風抱いている  
人生の午後で微笑み絶やさない  
芯からの苦しみだから口にせず

竹原市 古田 鈍舟

美しい便りを乗せて雪が来る  
友の計に鏡ゆつくり覗き込む  
子を叱る踏台がいる昨日今日  
裏返る亀休日 of 夫かも

霜柱ふむ足音が春を呼ぶ  
花嫁の父よ無言のままでよし  
原点に還り埋火掘りおこす



ジnkスへ埴輪無言のままで佇つ

広島市 光井 みほ

山茶花の白へ昨夜を裁かれる  
足跡の欲しい焦りと五十坂  
友情を暖ため過ぎた通話料  
決意する忍の一字のなお重く

竹原市 岩本 寛子

歯車の動きにも似て生かされる  
知恵おくれの子も交る焚火の輪  
どのくらい好きかと問うて困らせる  
安らぎは私に泣ける膝があり

和歌山市 浦野 和子

人が皆偉く見える日米をとぐ  
鮮やかな想い出だからひとと抱く  
とても優しい声で別れの嘘を云う  
寄せて引いて波がしかける恋の罨

熊本市 有働 芳仙

バレンティンなどと商魂に踊らされ  
ピンククレイ津々浦々に足を上げ  
陽のあたる道さけてゆく背が丸い  
天主まで所詮登れぬ薦かずら

和歌山市 坂口 公子

真白な雪も路傍で黒くなる  
煩惱の捨身が踏んでる怖い影  
梅一輪ほどの善意で満たされる

曲り角一つ違えて来た捨身

岡山市 原田 凡太郎

定年へ仮面そろそろ邪魔になり  
ご心配無用と胎児よく動き  
失恋の切なさ母も知っていた  
生きていくだけさるだけの母でよし

藤井寺市 中原 比呂志

信じたくないコメディアンがもつ悩み  
親として人間として曲げられぬ  
配転をされても正義の種は蒔く  
一筋の道を歩んでもつ誇り

東予市 小山 悠泉

裏の裏見抜く税吏の瞳が恐い  
老いて子に従いかねる職を持ち  
丹精へ芽生え初めた春の使者  
妻の切札私は里へ帰ります

唐津市 山下 勝一

モンタージュ犯人らしくないホシの顔  
まねき猫なかには困る客もあり  
明日知れぬ身だからこそ今日笑い  
ドカ儲してドカ損の穴に墜ち

東大阪市 萩尾 真佐志

番組欄だけ読む妻の社会学  
麻雀も酒の誘いもあり凡夫  
定退の今日目出度くも主役席

眠れぬ夜横には妻がいるものを

兵庫県 辻 文 平

セーターの愛の歴史をかみしめる

歩を金に使得不況など知らぬ

個性派と何と上手にいなされる

神様の罰です妻は取合わぬ

海南省 牛 尾 緑 楼

ひとり占めしてるつもりのプロマイド

身を捨てて金を残している汚職

命買いますとは書いてないローン

命まで子に譲りたい母であり

兵庫県 野々口 ゆう也

妻にやる自由の鎖り短いか

老妻と語るでもなく熱いお茶

一病をもつも長寿につながるか

散策で芽柳に春を教えられ

高槻市 竹 内 花代子

離職してから御無沙汰の足はこぶ

春の顔見せに雀が窓へ来る

言い訳を自分を守る楯にする

松江市 竹 内 寿 美

身構えて向えば犬も身構える

暖い胸だったと思う別れる日

待人は来ず白鳥の数かぞえ

名古屋市 越 村 枯 梢

葉牡丹の褪せて女の下り坂

黒い霧虚勢の裏の淡い影

一の字を書いて今年の運試し

豊中市 満 中 きく子

駄馬なりのこの気苦労を知るや君

アホでよし風邪など引かぬ方がよい

梅咲けば咲いたで浮かぶ亡母の顔

出雲市 森 山 健太郎

済まぬと思う不平を言わぬ妻だから

子会社に救って貰う破目になり

父ちゃんは甘いと次女にも見抜かれる

羽咋市 三 宅 ろ 亭

顔立ててやつと妥協に臍を決め

空元氣出している方弱み持ち

酒飲めぬ男真っ先き下座につく

高知県 山 下 登

二代目の朝夕まげが追付けず

のどもとへあい口が来る北の国

凶漢に凶器を許可す法のミス

唐津市 田 口 虹 汀

寝て観ても雪は失礼ねなど云わぬ

不用意な言葉二人に水をさし

恩を売る気持はないが愚痴となり

大阪市 堀 口 欣 一

入場は無料デパート有難し

ドラマにもしたい私の半生記  
午前四時思念は走馬灯のよう

寝屋川市 福 富 隆 子

もどかしい蛍光灯と知って居る  
古里の沈滞空氣がいら立たせ  
沈黙が今日は冷い女にし

松江市 岡 崎 雪 美

信じ合う夫婦に言葉などいらぬ  
責任があるくらしで病氣逃げて行く  
にぎり合う手のぬくもりは素直なり

鳥取県 石 井 雅 水

意地一つ抱いて小心持てあまし  
凡くらが金で裏門こじあける  
月賦では買えぬ笑いでとる夕餉

諫早市 江 副 二 牛

産ぶ声も二度目産婦にあるゆとり  
せせらぎにザリガニが聞く春の歌  
年長を買われ祝辞の席に立ち

岡山市 船 越 汽 水

お見舞いが観光団のように寄り  
付添いの昼のいびきは許される  
長期入院髭を伸ばそうかと想い

榎原市 西 本 保 夫

囑託として誠実に生きるだけ  
囑託の発言ここで止めておき

囑託の決意雑用に甘んじる

熊本市 北 川 一 進

県境ガラリとバスも雪景色  
玩具屋の前で小さなストをみる  
弁解をしている嘘の可愛らし

西宮市 山 田 喜代子

ふれあいが心に小波一つ立て  
家計簿を締めて今年も悔残り  
家族愛病室毎に見た入院

大阪市 前 川 玉 子

新顔のお国訛りが親しまれ  
汗と油かせいで入学金に消え  
油汗たんまりすうた優勝旗

島根県 角 耕 草

出稼ぎが帰って来るといふ掃除  
白鳥を呼ぶ餌桶をコンコンと  
策もなくまた米作の種準備

鳥取県 星 野 侑 正

ある日ふと虫の世界にあこがれる  
いつわりと見抜く女の冷い目  
晩酌をやめた理由は知らせまい

島根県 木 村 はじめ

一応は反対して置くのも手段  
ふり向いて又ふり向いて今日を寝る  
又値上げまばたき一つさえ待たず

人間も背中も丸くなって老い  
合格の余韻に母は寝付かれず  
節くれた指と対話の風呂上り

大阪市 小谷 清 女

年金に妻の財布の大き過ぎ

諦めがよすぎる妻に救われる

チグハグな妻のタクトに踊れない

尼崎市 中塚 喜 甲

不信感よらずさわらず遠ざかり

寡婦同士ふりむき合って耐えて生き

おだやかな顔であつさり裏切られ

長崎県 岩 崎 和 子

迷信も信じ人柄まるうなり

ご先祖の土地が医大へやってくれ

ふる里は秘境ブームで日が当り

川西市 氏 林 洋 敏

何よりの贈り物過疎へ医者が来る

叱るより黙った父にある恐さ

ノルマまだ果せず風邪の重い足

鳥取県 加 藤 茶 人

夫婦独楽今日はいくくる上機嫌

振りかざす拳がまるい父の愛

反逆の旗をちいさく振りつつけ

三重県 川 上 富 子

どっちみち買わすつもの案内状  
道しるべ無いから明日へ夢をみる  
夫唱婦唱混ぜ繰り合つて銀婚式

豊中市 田 中 善四郎

若者に話を合わす気の疲れ

この努力人の噂は運と言ひ

年金の中に小さい幸拾う

岡山市 花 田 たけ志

子の愚痴へ次元が違う母の顔

遺書かかぬ無言の抗議だつてある

日がたてば忘れまますよは他人様

寝屋川市 小 林 鯛牙子

ひらがなで書くと妖しくなつてくる

四十女へ言うてきかすに骨が折れ

目刺焼き婦唱夫随の恙なし

岡山市 砂 田 静 佳

消しゴムで消せない亡夫への思慕がある

梅の木の間へなつてさく水仙

北風の音譜でうたう枯ススキ

吹田市 藤 原 世史春

美辞麗句並べたあとの空しさよ

浪華ッ子は大坂弁が性に合い

戦争は嫌だし領土は守りたし

寝屋川市 高 田 てまり

大和高田市 岸 本 豊平次

忘れ物取り戻すよな寒波くる



待ちきれぬ春を花屋で買ってくる

岡山市 井上 柳五郎  
塔映える吉備路につづる四季の詩

二枚舌の甘い言葉になぶられる

大阪市 津山 刀水

泣きたい日もあろう人形

温もりが戻らぬ手にも爪がのび

出雲市 園山 栄

振りおろす拳が空を切る誤算

手さぐりで来た人間の曲り角

島根県 佐々木 裕

老夫婦テレビに相槌うって居る

生活の知恵が暮しを狭くする

新宮市 辻 式

追伸でちょっと楔を打っておく

こしやくなり子がブレーキを踏みにくる

富田林市 中村 優

知恵袋もたぬ男の軽い辞書

平凡な暮しを人に羨まれ

岡山県 池田 半仙

多数決妻には子等と云う味方

父よりも倍生き残すものが無い

長崎市 村崎 三車

自叙伝は時効の話で笑わせる  
鉛筆を尖らせ才女斬りまくる

出雲市 園山 多賀子

野仏も浮世の醜さ目をつむり  
愛情に限界があり不即不離

倉吉市 田民 碧水

垣の外手頃な枝の柿盗られ  
年金で妻同伴のミニ旅行

出雲市 石倉 芙佐子

所詮は他人どこかでそんなこと思う  
吉報に一足早い春が来る

出雲市 板垣 夢酔

心境の変化仏間へ妻籠る  
禁煙の先ず一服をどう裁く

大阪市 本多 俊子

ペランダに四季を彩るセラニウム  
孫みればせて永生きしたくなり

倉吉市 一風 庵

目札にふっと記憶を呼び戻す  
紀元節などと古さにふれて見る

総社市 水子 つるえ

防犯灯そこだけ光る雪の舞  
晩酌をえさに亭主は励まされ

鳥取県 和井 観洋

トンネルを貫けるとそこに父の靴跡  
蝸牛にとつては永い旅かも知れず

橋本市 岩倉 天彦

べんちゃらにまたうまうまと乗った判  
ふんわりと今夜も自惚れ抱いて寝る

倉吉市

野中御前

似合はない色でも流行追っかける  
白旗をかがけ内助の鈴をふる

尾鷲市

渡辺伊津志

命ある喜びばかり日向ぼこ  
時を追う人によもぎの芽が写り

青森県

波ただお

俺に似て柱時計が遅れがち  
一人居の部屋を潤おすヒヤシンス

佐渡郡

高墅不二

交際費で出て来るのもあるクラス会  
転勤の荷に父母のありがたさ

大阪市

内藤ますえ

応接間油絵かけて若返り  
タコ焼の油引から見つめてる

交野市

山本テルミ

年賀状郵便局でお正月  
人形のように着せてもらった初参り

東大阪市

坂本喜洸

油虫飼って居るよな友の家  
新社員誰にも素直に受け答え

唐津市

田中紫浪

耐えること知って人間幅が出来

松の内過ぎて焼酎に逆もどり

唐津市

浜本義美

白一色見分けのつかぬ女工員  
アルコール抜いたゴロ寝の日が寂し

唐津市

桑原掬治

炊事場の妻は楽しく背で語る  
降車までこの席おのが安住地

唐津市

松垣岩光

髪型を変える女に春が来る  
近道を教えてくれたので迷い

大阪市

平井露芳

販売機対話不足の始めなり  
紙おしめしてはあちゃん悲しまず

倉敷市

大森登竜

匂わない女になって紅をつけ  
黒幕は影おとさず踊らせる

和歌山市

堀端三男

昏迷のトンネル光まだ見えず  
沈丁花の匂い携え来た女

兵庫県

高橋近郊

海釣りの毛針に込める残虐さ  
急ぐ家路上首尾月には漏らしつつ

八尾市

田中紀美代

白むくのおおかた私の色になり  
知恵袋小出しに出して嫁姑

子の理屈正しいけれど負けられず  
猫柳夕日に光るつやつぽさ  
羽島市 伊藤 静枝

それっきり羽田で握手した別れ  
早春に画布未完成のまま病んで  
倉敷市 中島 彩平

定年が来ても自由は遠いところ  
受験生の机の上はさわるまじ  
大阪市 白石 潔

電話賃気になる所へ息子住む  
嫁方に似た孫抱いて物足らず  
京都市 松川 芳子

般若心経心豊かに今日が暮れ  
家の灯が一番夕飼あたたかい  
今治市 渡辺 南奉

希少価値明治生れの知恵袋  
出る釘を何故にみんなで打ちたがる  
出雲市 吉岡 きみえ

みかん一つ炬燵の上で不寝番  
言い勝った後悔つめたい風を知る  
岡山市 串田 句味地

落ちこばれ同志で定退の同期生  
朝礼の訓話自説を曲げて聴く  
大阪市 藤森 小雅子

兵庫県 中田 白李

石仏を見る眼が痛い老いの旅

独仙・湖楽氏喜寿

頑健な喜寿にあやかる酒と唄

杖をつく妻に合せる歩のせまし  
泉佐野市 大工 静子

諦めることにも慣れて庭親し  
旭川市 朝倉 大柏

気にすなと言われ気になる高血圧  
倉敷市 中津 伊勢吉

男と女の嘘が浮いてるジンファイズ  
呉市 山根 喜代美

ほろ酔いの時にやめればよい男  
島根県 山根 峰雪

ジーンズも晴着もこなす娘の背丈  
羽曳野市 麻野 秋畝

二次会に誘うた方が一人ぬけ  
岡山市 二宗 吟平

ふるさとへころがつていけ雪ダルマ  
島根県 松本 文子

五軒組それぞれ色のある暮し  
島根県 岩田 三和

子供らの夢を満たして消える虹  
岡山県 柳原 孝柳

町田市 竹内 紫鏑

出雲市 板垣 草丘

山を切りひらいた校歌それもよし

唐津市 玉置 箴

身近くですくすく伸びる孫がいて

唐津市 岩崎 實

いらだちをうつし本人知らぬ顔

大阪市 岡田 ふみ

産油国の争い主婦ひやひやし

大阪市 山本 炉 斉

一合の油は明日の活力に

兵庫県 川井 白 峯

暖冬は旅のオーバをもてあまし

橋本市 森 脇 善 太

日曜日待ってましたと熱を出し

八戸市 島 田 昭 治

反省の熱き涙を嗤えるか

大阪市 鶴 園 ハルエ

老いてなお油気のある爽やかさ

大阪市 村 島 秀 村

新顔は新顔同士話し合い

東京都 村 上 由希子

聖書読み心澄みたる日の遠く

岡山県 岩 道 博 友

言い負けた顔で相槌打っておく

愛知県 池 田 香珠夫

プール涸れて飛込台が巨人めき

徳利をころがし幹事走らせる

山口県 高 崎 雀 声

合格を絵馬に託する初天神

大阪市 野 田 君 枝

冬に咲く花たかぶりなど見えず

島根県 山 本 博 也

テストテスト人間死ぬまでつづき

出雲市 高 見 興 夫

★

平安の音色を今に琴はじめ

大洲市 米 沢 暁 明

内容を書きかえて来い会計課

盗まれて思いあたった不用心

友を語るその口ぐせの真似もして

平気ならそう 顔色も変るまい

出る杭の椅子には石が投げ易い

火消壺貧しき過去が詰である

埴輪の目どれも人間嫌いな

爪染めて女が登る砂の塔

正論も走ると胸の矢が痛む

神様の出番は来ないままで古い

お賽銭善男善女まだ迷い

土壇場に神サマ横を向いたまま

神様を母は気長く信じきり

岐阜市 市 川 鱗 魚

東京都 池 口 舌 歩



—水煙抄—

## 秀句鑑賞

—前月号から—

谷垣史好

一月二十七日、風強く今日は寒くなりそう。牛乳とトーストの朝食をとりながら新聞を開く。昨夜はNHKの「二・二六事件の秘録」と、高橋は清の生涯を描いた民放のドラマ「熱い嵐」を続けざまに見たので目がしぶい。二・二六事件は軍国主義日本への曲り角であったが、当時、青年将校に理解を示した山下奉文は、爾来、軍中央からしりぞけられ第一線部隊に追いやられて、最後は戦犯として異国の刑場の露と消えた。彼にとっても大きな曲り角であったということか。

何事もなかったように曲り角

古田 鈍舟

—それにしても太平洋戦争は無暴な戦さだったな。国と国との戦争は終わったが、ぼくらの暮しは毎日が戦さだ。新聞でも読みながら、ゆっくり腹ごしらえしよう。

冷え切った飯では戦さには勝てぬ

川上 富子

—まず第一面、E2C予算凍結か。グラマン事件の国会証人喚問も、ロッキードの時と同様、白けたやりとりで終始した。予想したとおり。

引き算がびつたり合ったむなしさよ

中森葉士人

—経済面に目を移そう。石油節約の国民運動展開、四八年のあのトイレットペーパー騒ぎを思い出す。いやな予感。「日本人は単一民族だから気が合う。変なところでは気が合うもんだから、皆同じようなことをやって同じ失敗をしましょうんです」と某大商社の重役が云っていた。

一匹がはねればみんな跳ねる魚籠

岩田 三和

—さあ、スポーツ欄はどうかな。西武のフロリダキャンプ、相変わらず太り気味の田淵選手がピキニのお嬢さんに囲まれての写真。古巣の阪神を懐しがっているはダメですぞ。海鳴りが聞えイルカの芸が落ち

江副 二牛

—プロ野球が始まらんことには大した記事はない。では社会面へ。「京都のホテルで女高生飛び降り自殺」、少年少女の自殺が最近異常に多いのはどうしたことか。小学校四年から六年までの高学年児童へのアンケート調査の中で「死にたいと思ったことがある」と答えたのが実に三〇％近くある。しかし親はわが子が死にたいと思ったことがあるとは殆んど考えていない。親と子の意識のギャップは深い。

子の愚痴へ次元が違ふ母の顔 花田たけ志  
思春期の親を見る目の濁り勝ち 矢野佳雲

—暗いニュースはそれ位にして何か明るい話題はないか。あった。仁科明子と松方弘樹が暗れて婚約記者会見。こういう記事は目を皿のようにして読む。親父さんの岩井半四郎も遂に折れたか。久しぶりの親子対面では父の方がテレしていました。と。さもありなん。所詮、子は親を裏切るために生まれてきたのかもしれぬ。

子が巣立つこれもひとつの裏切りか

加藤 茶人

—朝刊をゆっくり読んでおられるのも自由業の余得。でも、ぼつぼつ腰を上げよう。寒くなりそうなので厚手のコートで出かける。

—仕事は順調、一パイやりたかったが、一軒が二軒、二軒が三軒になって

三次会 得体の知れぬ女来る

荒田 つる

なんてことになったら大変。真直ぐ帰宅。三月号に正月の句がかなりあったのは、切り関係で致し方ないことだが、やはり「六日のあやめ」の感否めない。

—夜もまだいぶ遅くなった。忘れ難い句を四つ五つ記して、ぼつぼつ寝るとしよう。

無造作に切手を嘗める逞しさ

秋 畝

夢のない女枯葉を掃いて捨て

孝 柳

ポックリのついでに長寿をも頼み

蛍光灯あかんあかん灯っている

日の暮れる早しあわせ過ぎるから

喜 甲 南 奉

# 愛染帖

## 橘高薫風選

大阪市 西 出一 栄

未完のわれに喜寿たまわつて恥かしい  
病みつきし印象だけの古曆  
春星の潤みもつ夜は人恋し

寝屋川市 小林 鯛牙子

奈良びとの貌して山火仰いどり  
フェノロサの墓に漢文字寒の菊  
釣り人へあひるが寄つてゆく温さ

倉敷市 水粉 千翁

頂上へ必らず登るおろかも  
汚れなき空間にして芽が覗く

今治市 月原 宵明

勲章の代りに老人手帳受け  
一生を働き抜いて居士もらつ

東京都 山根 白星

窓ぎわにまします隠れキリシタン  
ドレミファソ一輪さしの水滴ちる

青森市 工藤 甲吉

病雀も窮亀も政治見てくれず  
合いそつもなし金の面俺の面

大阪市 小出 智子

大きな鏡で私を見たりせぬように  
昼下りタワシが小言ゆうている

尼崎市 黒川 紫香

行きすりの女に匂い残される  
飛瀑玲瓏として不動に似る

岡山県 白岩 文衛

何となく辞書繰つてよむ何となく  
さみしい日妻と明日を言つて寝る

尾鷲市 渡辺 伊津志

水の輪の揺らぎの中に贖罪す  
古傷が又疚き出す独楽の芯

鳥取市 河村 日満

グラマンに根みが消えぬ罹災証  
身体髪膚酒を飲めよと習いしや

富田林市 中村 優

活殺の剣はいらぬ紅がある  
一步距離置いてあの人美しい

竹原市 古田 鈍舟

逢みての後は平々凡々で  
旅ひとり漁火遠く凍りつき

島根県 堀江 正朗

なに色か二月になつて降る雪は  
内緒聞く耳は右かな左かな

神戸市 宇佐 美和子

ガラス絵の向こうは妻のいるひとよ  
寒椿おとこおんなとなりゆけり

大阪市 西森 花村

人試合格一番星のような顔  
コンクリート鼠の道もきびしいね

倉敷市 田垣 方大

離婚してやる愛情もあり男  
女性とは情深きもの針供養

和歌山市 西山 幸

タンブラー温くいてのひら欲しい日よ  
驕る靴温くいこころを春通りす

室戸市 石建 よしみ

平凡に生きると決めて海の青  
背を向けて髪梳く女ある打算

唐津市 新岡 回天子

天寿だと思つに弟子等泣いている  
墨痕が生きる氏名の隅にまで

竹原市 岩本 寛子

人恋えば走馬灯の絵がまわる  
人間模様私の彩がまだ選れず

岡山市 川端 柳子

春惜しむ無限にさくら咲いて散る

父さんの靴下片方裏返し

鳥取県 鈴 木 村 颯子

孤独とはラッシュの中に思つべし

節高の指に綴つた人生史

宝塚市 吉 田 笑 女

友の手のぬくもり幼い日へ戻り

愛される姑になるにも金が必要

寝屋川市 江 口 度

披露宴写真のぎよろ目はみな身内

院長と坊主が坐っていた会合

島根県 小 砂 白 汀

金にシッポ振るぐらいなら風になる

台風にたわむれかかる糸柳

名古屋 大 林 曲 手

旅先に雲あり雲の旅を見る

万札とぶらりぶらりと春の宵

島根県 堀 江 芳 子

第三者からはおかしい慣り

医者の言う一合酌げばあつけない

名古屋 越 村 枯 梢

一枚の名刺の裏にある野望

雲一つない青空のもつ不安

伊丹市 榎 谷 寿 馬

お伽噺をよく知っているブルジョア

京都市 松 川 杜 的

落椿一輪通天へつづく道

和歌山市 津 田 与 史

抜け殻が今朝も八時に乗る電車

和歌山市 若 宮 武 雄

微動だにせぬ竹藪に潜むもの

長崎市 村 崎 三 車

窓越しのカラスを疎む熱の朝

八尾市 宮 西 弥 生

女の友情ものさしに余る

八尾市 高 橋 夕 花

ネギ坊主こぼしていった愛で足り

兵庫 遠 山 可 住

賽銭箱の前で世相を考える

大阪市 川 口 弘 生

追悼の銀河鉄道音がない

八尾市 大 路 美 幸

秒針が三つ動いて一つの命

鳥取県 和 井 観 洋

社長の唾液を課長が持つて来た

今治市 胡 頰 子

早過ぎた帰宅病気にされるなり

鳥根県 岩 田 三 和

恋をして嘘がつかないいい息子

大和郡山市 森 田 カズエ

教育勅語すらすら云えて悪の顔

竹原市 古 谷 節 夫

善人を血祭りにあげ酒肴

川西市 戸 田 古 方

紫がこんなに甘い色に見え

大阪市 津 山 刀 水

病院から帰ると鳴っている時計

堺市 高 橋 千 万 子

見ぬ振りをする人間の温と冷

岡山市 清 水 金 太 郎

何か得をした様な暖い日

大阪市 河 野 君 子

人脈をこぼれた男の唄を聞く

富田林市 岩 田 美 代

跳んで飛んで翔んで男は消えたまま

愛知県 池 田 香 珠 夫

どの農家にも犬が居て椿咲く

大阪市 藤 森 小 雅 子

大正の恋麗しき候文

倉吉市 奥 谷 弘 朗

人間の磨き抜かれた顔の艶

竹原市 三 宅 不 朽

地のえくぼ霧の雫が落ち椿

唐津市 田 口 虹 汀

喜寿米寿古稀と順序をかえてはし

大阪市 神 谷 凡 九 郎

掌でころばして見る自分

藤井寺市 中原 比呂志  
強がりを言うて辞令は受取った

今治市 越智 一水  
初日待つ声若者とすぐわかり

東大阪市 竹中 綾女  
婚約指輪孫のきれいな手に光る

岡山市 串田 句味地  
憤りが拳の隙からこぼれ出し

守口市 野呂 右近  
改選の無い夫の地位妻の地位

高槻市 若柳 潮花  
花の水かえて女は留守を去ぬ

米子市 小西 雄々  
蛍雪の功など大学卒知らず

堺市 伏見 茂美  
道聞けば黙ってカミさんに入れ替り

町田市 竹内 紫鏑  
書き足そうポストの脇は遊園地

西宮市 朝山 千世子  
雪まつり残店の世を浄化させ

島根県 飯塚 虎秋  
母の持つ旗は涙の匂いする

平田市 久家 代仕男  
一昨日を記憶昨日は忘れとく

唐津市 田中 紫浪  
ペンダント胸に外国へ派遣され

京都市 都倉 求芽  
すぐ先の晴れ間しか見えぬ道

和歌山市 松原 寿子  
貴方の胸にいつも誰かが甘えてる

大阪市 藤田 頂留子  
一人世帯今日もテレビにしゃべらせて

京都市 山本 規不風  
脅えてる心へ氷柱落けてくる

唐津市 浜本 義美  
健在なりうちの時計も還暦か

今治市 矢野 佳雲  
舟簾笛あければ母の木綿もの

熊野市 坪田 冬花  
咲いて散る花に病いの床淋し

山口県 高崎 雀声  
退院を喜ぶ様に日本晴

呉市 山根 喜代美  
子供まで無口になった都市砂漠

唐津市 山下 勝一  
成人式すめば結婚式が待ち

松江市 柳楽 鶴丸  
清纯で真面目な女のエロチシズム

倉敷市 藤井 春日

吾が社にもタカ派ハト派と策を練り

倉敷市 小幡 里風  
再会のともあれ別れしかない握手

島根県 西村 早苗  
再会は遠き渚がよみがえり

松江市 岡崎 祥月  
温泉は姥捨山の憩い場所

岡山県 池田 半仙  
まざまざと俺の欠点子からみる

出雲市 板垣 夢酔  
公共が腰を上げるとすぐ反対

羽曳野市 麻野 秋畝  
結論へ長老という横車

島根県 山根 峰雪  
泣き顔も写して残す子の記録

兵庫県 中田 白李  
手酌の味また格別な星明り

旭川市 朝倉 大柏  
鈍感な男へ女酔っている

鳥取県 石井 雅水  
青い鳥抱いてるような新世帯

寝屋川市 宮尾 あいき  
シャボン玉さえも一瞬虹を抱く

神戸市 来住 タカ子  
人恋し山ははるかに朱の深さ



## ある便り

「会瀬の青藍」書評にかえて

香川 醉々

弱りました。困りました。驚きました。

紫錆兄。兄と呼ばしてください。確かに小生より先輩に当たりますから。二月本社句会の席上、薫風さんから、一冊の書を渡され、読後感でも書いてみないかと、「会瀬の青藍」でした。句集読むのは大好きな小生ですから早速拝見しました。世の中にはなんと境遇の似た方もおいでになるということに。學歷、兵歴、職歴、趣味、おまけに病歴まで。府高の理甲のこと、小生もS高の理甲です。この言葉も、死語になりました。理甲、理乙懐しいことはです。そうです。第一外国語が英語で、第二外国語が、独語でした。第二には苦勞しました。デル・デス・テム・デン・ダス・デス・テム・ダス、まるでパチンコ屋のボスターみたいでした。小生が、川柳に手を染めたのも、入院中のことです。兄もそつらしいのです。

脱柵に連れの一人が白すぎて

試歩伸びて財布たしかに持つ今日

小生も同じ経験を積みまし。

酌ぎに来た所長へ全治申し上げ

小生も出社して受付で、どなた様ですかと聞かれたときは、がっかりしました。受付の娘が新入社員でしたから。

すわれないつらさも慣れて技師となり

一等旅費あます主任の列に入り

タイムカード元将校の顔でなし

やめた娘の名も呼び課長忙しい

新製品の名づけに笑う会議室

職場風景、ほんとにサラリーマンの世界でした。

二十年捨てざる本の著者に会う

先輩の紹介で、水原秋枝子先生や、山口誓

子先生にお目にかかれたときは、確かに感激

でした。

上京の距離で消化す新書版

気に入った随筆寝台車の灯り

大阪から博多まで寝台車中は、松本清張一

冊読めましたから。

地下鉄の一駅あさる古書の店

遍歴の読書にテープ鳴る書店

上京すると、神田うろつくこと、地下鉄の

大塚ですか、俳書専門の古本屋へ行くのが楽しみでした。

校正に才女を知れり社内報

社内紙に載る顔胸のチャック引く

小生も目下ある社内報の川柳欄の選者をして

います。他社のものでも、読むと興味が

て来ます。

プロに二枚落の腕前の由、お強いですが

一度御来阪の折には、お指導願いたいもので

す。

★

▼川柳塔社常任理事会（二月二日）本年初の

会合である。集る人―与呂志・形水・百酒・

太茂津・柳志・紫香・潮花・古方・生々庵・

萬的・好郎・岳人・栗・一三夫（敬称略）

▼三月の常任理事会は五日に開催。全日本川

柳大会など関西柳界も忙しくなる。今後の常

任理事会は四日を中心に月曜日と木曜日にな

る。四月は五日。二賞発表句会は十月七日。

出席 生々庵・薫風・水客・紫香・潮花・百

酒・与呂志・栗・萬的・岳人・一三夫諸氏

名古屋市 鈴木可香

掘りたての諸へ故郷をかみしめる

言葉の端しばし人柄かくされず

太陽の下でわかった嘘を言う

きれいな水が自慢文化に遠く住み

いまここで涙見せては親の負け





# 春を連れて

## 大萬川柳大会がやって来た

54年2月25日  
会場・大萬

柳 話  
昭和五十三年度ベストテン表彰  
席 題「とばっちり」

飛田好一選  
若宮武雄選  
橘高薫風選  
梅原憲祐選  
西山 幸選  
八木千代選  
藤岡花梢選  
香川 酔々

閉会の辞  
ベストテンご招待懇親宴

(大路美幸氏の欠席で薫風氏が代選された)  
七一氏出席という盛会は、さすがに、大会  
キャリア26回がモノを云う。

まずは西田柳宏子氏の司会から大会の幕が  
あく。今年から開会と閉会の辞はフレッシュ  
コンビ・高杉鬼遊氏と香川酔々氏。

柳話は変らず川柳医傳の中島生々庵主幹。  
お話しはご本職の医療関係である。はじめは老  
化現象に入った場合、ご自身の体験なども織  
り混ぜ、とくに記憶力の核心にふれられると

場内、シーンとなる。すでに老境に入った人  
たちには聞き逃がせないことはかりである。  
だが、ここまでの医話はマクラであって、  
主幹専門の小児医学となると、これはもう柳  
話などというものではない。權威ある名医の  
発言として傾聴に価するものはかりである。  
本誌前号の巻頭言にもあるように「母乳栄養」  
から、少年少女の自殺続発等の問題にまでメ  
スがのびるのである。群馬大学の松村教授は  
「あなたの子どもは、牛」ではありません」  
とまで極言されたとか。

「母乳か」「ミルクか」ということで  
ある。母乳栄養と人工栄養から「柄井川柳」  
という。母乳を忘れるなど喝破される。後  
進の人たちを指導するときは、まず川柳の基  
礎からと、やわらかい言葉の中で警鐘を打た  
れた。

主幹の有意義のお話が済むとベストテンの  
表彰になる。好郎会長から授与されるトロフ  
ィーは、一年の苦作をねぎらうかのように爽  
やかな輝きを見せ、それを手にするベスト10

会場である松崎町三丁目の「大萬」の表に  
「第26回 大萬川柳大会」と墨痕淋漓。現大  
萬当主である松江克美氏の筆だと一と目でわ  
かる。場内の文字もそうである。

司 会  
開会の辞  
西田 柳宏子  
高杉 鬼遊

氏の晴れ姿が美しい。

病氣療養中の傍島静馬氏の敢闘精神、わず  
か0・5点の僅少の差で準梅里賞になった八  
木千代さん(米子市)本年もまた堂々の梅里  
賞に輝く大萬川柳のクイン藤岡花梢さんほか  
それぞれあたたかい激励も忘れない好郎会長  
である。

「来年こそは、常勝花梢さんを破る人が出  
てきてほしい」と。

披露に入る前に緊張感を和らげるため、村  
田瓢太氏がカスリの着物で大学生姿よろしく  
登場。お得意の奇術を引っこめて「活弁」で  
ある。ふるう熱弁は「月形半平太」だ。泉詩  
朗より迫力があり、かつての伍東宏郎を想起  
させるものがあつた。

ここから今日ご出席の方々お待ちかねの披  
講に移る。―選者室をちよつと覗いたが、選

者諸氏も必死だった。(記録・河内天笑)  
ベスト10にトロフィー、三才に賞品、主催  
者も大変だと思つた。

披露がすむとベスト10招待懇親宴である。  
スベースがないが、米子組の八木千代、林瑞  
枝、石垣花子、佐伯越子さんらの「ひえつき  
の歌」に合わせたの銚子の見事な乱舞と、千  
代、越子ご両人のお腕をカスタネットにして  
乗つての熱演。称して「米子少女歌劇団」に  
して。和歌山少女歌劇団「は千寿子、幸、和子  
さんで。新和歌浦小唄」も好評。

公私多忙の生々庵主幹の帰りがけを司会の  
天笑さんが引きとめ一曲所望。トリは名司会  
の柳宏子氏の「どじよう掬い」である。川柳  
塔屈指の美男が顔に墨を塗つての熱演はプロ  
はだし。第二部司会の天笑さんが、米子勢か  
らのお土産を賞品にするなど、大萬川柳大会  
ならではのメイ調、メイ演に湧きかえる。そ  
の他、ご出演の皆さん、ご苦労さまでした。  
大坂形水氏の万歳三唱の音頭で賑やかに午  
後七時閉会となる。

―このあと、克美ご夫婦の唄と三味線という  
特別出演があつたとか。  
★ベン・不田一三夫―カメラ・板尾岳人。

### 三才と軸吟

#### 兼題「岐路」

藤岡花梢選

人 鐘の鳴る方へ鈴向く岐れ路 一三夫  
地 岐路に立つ男系図の重さ知る 千万子  
天 潮騒いが女の胸にひびく岐路 酔々

軸 さまざまな岐路が私を強くする

#### 兼題「好意」

八木千代選

人 愛でない好意と知つた日の失意 邦晴  
地 その好意大き過ぎても疑がわれ 一三夫  
天 どのみ手にすがろう千手観世音 憲祐  
軸 ご好意を信じ素直に叱られる

#### 兼題「おしゃれ」

西山幸選

人 おしゃれして男一匹殺された 太茂津  
地 俺だけに的を絞つてきたおしゃれ 天笑  
天 おしゃれして花の素顔に負けている 和子  
軸 カルダンを着ても二枚目になれぬ

#### 兼題「周囲」

美幸代選 橋高薫風選

人 能面の周囲は深い霧である 酔々  
地 笑つたり泣いたりさせにくる周囲 智子  
天 十字架を負つて周囲に気付かせず 千代  
軸 人払いしても周囲に気を配り

#### 兼題「焼鳥」

梅原憲祐選

人 焼鳥屋動らく汗の匂うとこ 重人  
地 焼鳥の匂いと残業から帰り 花梢  
天 目は串に耳はお客に焼鳥屋 寿馬  
軸 焼鳥の味を仕上げる竹の串

#### 兼題「とばっちり」

飛田好一選

人 とばかり天下御免のストに泣き 一三夫  
地 風上にたたなされていたとばかり 雀躍子  
天 アリバイが崩れたメモのとはっちり 太茂津  
軸 とばかりもろに受けてる保証印

#### 兼題「二三日」

若宮武雄選

人 糸切れた服になりたい二三日 恒明  
地 二三日心が痛む小鳥の死 夕花  
天 みごもつた幸二三日ひとり抱く 千代  
軸 子の家にいるもても二三日

すくすく

(雄峯氏代選)

## 不二田一三夫選

お手植の松 すくすくと天を指し  
 すくすくと伸びた戦災孤児の詩  
 すくすくと伸びて素直に割れる竹  
 実力がすくすく顔出す選抜校  
 すくすくと伸びて五輪へ夢をかけ  
 すくすくと伸びすぎ小粒の花が湧き  
 天を突くポプラ 母校の夢が湧く  
 すくすくと伸ばすよき師にめぐりあい  
 行く雲へすくすく伸びた木の孤独  
 子会社の方がすくすく伸び続け  
 倒産も知らず工場のポプラ伸び  
 すくすくと金にあかせたノッポビル  
 保育園すくすく育つ子が溢れ  
 父さんの寝巻きが合わないで弱れ  
 飛行雲すくすく夕日を追って行く  
 肥沃地に播かれ すくすく恩がえし  
 すくすくと春へ弾けたこぼれ種子  
 早苗伸び急ぎ いくさとなる田圃  
 すくすくと天指す杉がガスに負け  
 杉苗のすくすく伸びる急斜面  
 芦の芽のすくすく伸びて鴨の宿  
 紅葉手にすくすく伸びる生命線

訳あつてすくすく育つ子蔭から見  
 祖父植えた杉すくすくと背を競う  
 すくすくとただそれだけを希う母  
 縋りつつ這いつつ蔓は背伸びする  
 すくすくと引きのばされる一人っ子  
 友情がすくすく恋になる若さ  
 すくすくと伸びる舞妓の大き過ぎ  
 すくすくと育てた筈が節も出た  
 太陽の過保護すくすく伸び過ぎた  
 片親にしては素直な子に育ち  
 すくすくと育ち何かが欠けている  
 温室ですくすく風のりきれず  
 呼吸器の中でカルテの良い知らせ  
 すくすくと鳶の葉南欧風に伸び  
 伸ぶ曲がる一雨所潤の娑婆に住み  
 すくすくと土割り土筆は春の使者  
 保健証出番ないまま子の育ち  
 欲の巾すくすく伸びる子に負担  
 すくすくと伸びたモヤシにない根性

住  
 五つ子の個性すくすく育つ日日  
 すくすくと軀は確かに育つて  
 もめる間もすくすく境の木は育ち  
 すくすくと伸びててかや姫おらぬ  
 すくすくとこのびても竹は木になれぬ

人  
 すくすくと育つ娘と庭の桐  
 自転公転すくすく春がやってくる  
 地  
 竹の子すくすくこの世にこわいものがなし

天  
 不 二 古 方 竹 馬 文 武 平 大 秀 秀 虹 花 一 方 静 翁 一 枯 規 茶 多 久 木 春  
 二 方 馬 平 柏 峰 エ 汀 子 進 大 泉 路 梢 石 人 賀 仁 魚 亭 日

新 顔

## 若宮武雄選

新顔に賞をとられて句座たのし  
 新顔も混え句会のなごやかさ  
 新顔の秀句へ拍手の音温し  
 新顔に生徒があだなもう見付け  
 新顔でもてはやされる夜の蝶  
 新入社タイムカードの祝う音  
 新顔がふえて社内に着いており  
 新顔へうわさが先に着いており  
 新入社一分の隙もない身装  
 新顔の美人が変えた社の空気  
 新顔が美人で世話もかつて出る  
 嘱託とは知らず新顔頭下げ  
 新顔が給仕にまでも頭下げ  
 新顔にお辞儀をされる髭があり  
 新顔の愛嬌のある国訛り  
 新顔のお国訛りが親しまれ  
 新顔に拍手が欲しいディレクター  
 新顔がホットな風も持つてくる  
 新顔の人氣にチームの和がくずれ  
 新顔の改札定期をよく睨み  
 新顔に期待かけてる社の不振  
 新人が立って夫婦の票が割れ

勝 一 登 美 也 重 人 早 苗 ス ツ 子 は じ め 虹 汀 芳 仙 優 越 子 保 夫 登 方 大 こ う 玉 子 天 彦 里 風 無 人 満 津 子 勝 美 カズエ



帰りにほもう新顔の貌でない  
 新顔に上司の方が気がつかない  
 新顔が上司の息子が気がつまり  
 新顔のバツジが映える三ツ揃い  
 詰襟のホックもフレッシュマンらしく  
 店舗改装新しい顔で客を引き  
 新顔がそれとなく知る杜の派閥  
 新顔の無垢な意見に座が白け  
 新顔のふりして情報キャッチする  
 新顔もベテランもない練習地  
 新顔を窘めている屋台酒  
 新顔のフアイトにベース乱される  
 新顔のフアイトに隋眠から目覚め  
 作業着が社長と新顔気がつかず  
 新顔の眼鏡きらきら光っている  
 太いコネもつて新顔あわてない  
 ベテランの意地新顔に負けられず  
 新顔へ親切それから無二の友  
 新顔のタレントあんなこともする  
 新顔が来て雑兵が一人去り  
 住  
 新顔の孤独へ声をかけてあげ  
 七光り背負って新顔のひくい腰  
 新顔が不気味に見えてくる落目  
 新顔を人間にする退社ベル  
 新顔の便所掃除にある大志  
 人  
 新顔の世の裏知らぬ眼の光  
 地  
 新顔としてお茶汲みのコツを聞く  
 天  
 和弘朗之  
 裕女  
 古方  
 春日  
 宵明  
 素身郎  
 比呂志  
 碧水  
 三車  
 武水  
 道子  
 軒太楼  
 洛醉  
 本蔭棒  
 悠泉  
 雅風  
 凡九郎  
 和子  
 凡太郎  
 翁童  
 可住  
 奇童  
 茶人  
 どんたく

轉  
期

新顔の瞳信じて愛の鞭善太  
軸  
大ものの相新顔の大あくび

大鶴喜由選

好転をねらう努力と辛抱と  
 転期まだ幸福もまだ遠くあり  
 定年を転期としての図面描く  
 転期だったとつくづく思ふ米作り  
 今年こそ転期に立った二浪の灯  
 うたかたの転期夜空のコップ酒  
 後悔が心の隅にある転期  
 転期する覚悟タバコの輪に託す  
 生活のリズムが変る孫ができ  
 失恋の転期みどりの髪を切り  
 転業の予定を延ばす不況風  
 胃半分にされて禁酒へする決意  
 この辺で転期がほしいミスで居る  
 退院を転期とせよと空の青  
 この転期妻痛い程手を握り  
 母の涙に捨てて帰ったヘルメット  
 今日からはりばりやるぞ父になる  
 今が転期旗あげる夢を持ち  
 ねらわれた転期おみくじ吉と出る

天明  
 昌水  
 文平  
 栄美  
 登也  
 優  
 秀峰  
 早苗  
 胡頹子  
 本蔭椿  
 三車  
 カズエ  
 洛醉  
 どんたく  
 寿美く  
 枯梢  
 凡太郎  
 保夫  
 天彦

川柳塔柳箋

あゝ愚あとかから転期と氣付き  
 声変りそんな転期が遠ざかり  
 茶柱で決心をする 転期  
 政策の転期泣くもの笑うもの  
 失恋の転期〇し金を貯め  
 定年が早過ぎますと職を換え  
 転期にもならず都会の隅に生き  
 そうだった転期だったと後の知恵  
 転期する夜の女の厚化粧  
 失恋が転期見合に乗りかえる  
 停年の男 転期の壁に竹つ

佳

そろばんをはじき返して見た転期  
 新築の家が荷物になる 転期  
 一発の夢を転期にかけて見る  
 左遷から生きたる転期を教えられ  
 減反の転期離農につながつて

人

アニスでもしようか育て終りけり  
 地

政策の転期泣くもの笑うもの  
 天

ネクタイの要らぬ二度目の勤めする  
 軸

かけひきの術も新入教えられ

健太郎  
 勝美  
 方丈  
 代仕男  
 洋々  
 碧水  
 久仁於  
 翁童  
 静泉  
 多賀子  
 一路  
 素身郎  
 裕  
 七面山  
 越子  
 きく子  
 宵明

# 初歩教室

題—都合—

本田恵二朗

二十年ほど前であつたか、私は(柳恵)という語を創つた。それ以来今日まで心の中で常に用ひ続けている。川柳することによって私の心が色々な恩恵を受けて、心豊かに、明朗な毎日を迎へ送ることが出来ることを要約して柳恵と名付けたわけである。しからは色々な恩恵とはどんなものであるか、それは柳友の皆さんが、それぞれに身をもつて体験し、その体験を日毎、年毎に積み重ねて、色々な恩恵を受けられつつあることと思う。そのよき体験の一つ一つが、あなたの人間性を円満に助け続けているにちがいない。

教へられて知ることよりも、自ら発見し、悟つたことの方がはるかに価値がある。それは金銭であがなぬ尊い価値である。そんな川柳人生を私は柳恵と唱へるのである。

逃げの手を打つた都合のうまい口  
(都合よく逃げの手打つた舌三寸)

胡頹子  
同

(老いの都合つけて運ばす義理の足)  
ご都合を開けば秘書そっけない  
(ご都合を問えばそっけない女秘書)  
ゆうずうのつかぬ男の狭い視野  
(融通の効かぬ男に視野がない)  
神様の都合で黄泉へまだゆけず  
(神さまの都合であの世がまだ見えず)  
交通の都合で私立の門くぐる  
(交通の都合私立にゆこうかな)  
(私立受験交通の都合のように云い)  
あかんたれが手帖に書いてる都合  
(あかんたれの手帖くどくど都合書き)  
都合つけて来た会雑談ばかりする  
都合よく極楽の椅子一つ空き  
同 枯梢  
歯車のように都合は噛み合わず  
(歯車のようには都合が噛み合わず)  
楽隠居都合の悪い日ないらしい  
(都合つかぬ日はないらしい楽隠居)  
新婚に都合を聞いて訪問し  
(都合を聞かねば行きにくい新世帯)  
都合のよいことだけを自由と云い  
(都合よいことだけを自由主義だと云う)  
都合など聞かず行商荷を担げ  
都合よいとこへ電話のベルでけり  
(都合よく電話のベルに助けられ)  
飲む真似で都合が決る良い仲間  
酒次第都合をつける左き  
(オニコラの仲の都合は酒次第)  
妥協案のめば都合が干涸びる  
吹き抜ける風に都合を持ち去られ  
(隙間風の無情が都合に突き刺り)  
同 寿子  
同 小雅子  
同 喜代美  
同 刀水  
同 日青人  
同 可保留  
同 梁川  
同 同

愛があるから彼の都合を見逃そう  
(愛があるから彼の都合へ目をつむる)  
普段着で都合の悪い人に遇い  
都合よい挨拶すこし水臭し  
(都合よい挨拶なんだか水臭い)  
片思い都合つけてるよう出会い  
(片思い出会えるように都合つけ)  
アリバイの都合も出来た顔帰る  
(アリバイの都合もつけた顔戻る)  
狐と狸の都合酒にしよう  
(狐と狸の都合では酒にしよう)  
常識も少しゆるめて妥協する  
(常識も少しはすして都合つけ)  
都合よい時に来たまああがれ  
(都合よく特級酒があるまああがれ)  
不都合な割込みから列くすれ  
(不都合な割込みから列くすれ)  
ご都合で補聴器外してそっぽ向き  
都合つく時でよい金親に借り  
上司の命無理に都合をつけさせ  
(上司のご都合へ都合をつけさせ)  
言い逃れたものの都合つく当てが無し  
(都合つく当ても無いまま言い逃れ)  
入婚が都合の付いた顔で来る  
大物の都合で裁判延期される  
(大物の都合で裁判また延びる)  
先様のご都合次第という弱味  
都合よく皆んな予定のない日取り  
不都合の尻は結局親が拭き  
人様の都合に合わせ自主失せて  
(人さまの都合まかせて自主が無い)  
同 善四郎  
同 紀美代  
同 三十四  
同 柳五郎  
同 保夫  
同 無人  
同 瓢太  
同 静枝



都合よく出合った場所は繩のれん 同  
 (都合よくばったり出合った繩のれん)  
 都合よく姉の晴着で間に合わせ 同  
 (都合よく姉の晴着がびたり合い)  
 義理の子へ都合の有無は許されず 同  
 (義理の子へ都合がどうのと云うとれず)  
 不都合を武士の情で依頼免 利美  
 ふところの都合でとんだ恥をかき 同  
 日本語の便利なものに家事都合 同  
 (ニホン語の便利な家事の都合で済み)  
 おばあさんを父の都合で母と呼び 慶彦  
 見られては都合が悪い娘の日記 同  
 その時の都合で添うたり別れたり 同  
 里帰り都合けたと思にきせ 三男  
 都合よくアリバイ出来たと酌み交す 同  
 (アリバイの都合も上首尾酌み交す)  
 不都合を詫げる電話に頭下げ 御前  
 (不都合がペコペコペコと電話口)  
 不都合を重ねて暮れの義理を欠き 同  
 (不都合が敷居を高く高くする)  
 返済の都合つかずにコップ酒 幸  
 (返済の都合がつかぬコップ酒)  
 神様の都合で美女やら醜女やら 同  
 (神のご都合で美女創り醜女創り)  
 その時の都合で舌の音が変り 三和  
 (時の都合都合で舌の音替える)  
 都合よく顔出す人は犬の鼻 同  
 (都合よく現れなした犬の鼻)  
 指令なら否応なしの都合つけ 同  
 (否応のない指令へ都合つけ)  
 逢える日の都合ばかりを考える 佐代子

(逢える日の都合は万難排しても)  
 都合によりと都合の良い言葉です 同  
 (都合によりとは都合のよい言葉)  
 貧乏の都合は作業服だけが知り 句味地  
 (貧乏神のご都合作業服は知っている)  
 都合の悪い影が月夜に追うて来る 同  
 (都合悪い影に追われる月夜追)  
 こんな無理都合をつける母がいる 静佳  
 (百の無理母てきばきと都合つけ)  
 ご都合を聞かずとび込む救急車 同  
 (救急車医師の都合など云うとれず)  
 出土品先生都合で説を変え 美智子  
 (出土品の都合で教授は説をかえ)  
 暖冬の都合に農事狂わされ 同  
 (太陽の都合ではうれん草伸び過ぎる)  
 子を叱る都合はどうも親にあり 同  
 (親の都合で子供らは叱られる)  
 都合にて欠席返信に小そく書き 翁童  
 (都合にて欠席さもわるそうに書き)  
 都合つき次第行きますと暇なのに 茂美  
 (暇なくせ都合がつくかなと云う)  
 都合など云っておかない好い話 露杖  
 都合のよい時だけ気煙上げる奴 同  
 (都合のよい時だけ上げる怪気煙)  
 ご都合ですけ替えられる首並ぶ 同  
 (ご都合ですけ替えられた首を撫で)  
 何事も相手次第で都合変え 頼次  
 (相手次第都合の彩を七変化)  
 旅行好きどんな時でも都合つけ 同  
 (旅行好きなのはともあれ都合つけ)  
 遊びともなればすぐく都合なり 紀久子

(遊びなら早速都合がつく仲間)  
 嘘の都合が幼い吾児にばらされる 同  
 (都合という嘘を幼稚園にばらされる)  
 都合よい話の時は耳近く 同  
 釣書へ都合よい趣味書き込ませ 英子  
 (釣書へ都合よい趣味だけを書き)  
 人間の都合通りには海風がず 同  
 (ヨットの都合などとは知らずつむじ風)  
 (釣糸の都合など知らず波踊る)  
 (焦点をしぼると風景があざやかになる)  
 金都合つけて女を待っている 静泉  
 (ふところの都合をつけて女待ち)  
 題—あと味— 4月20日締切(6月号発表)  
 宛先 岡山県倉敷市下津井一―九―三四  
 本 田 恵 二 朗



**ATLAS**

**プレス**

高級洋菓子・レストラン

堺市役所前

TEL (21) 2334

大 萬 川 柳

「 油 」

入選発表

選 者 川 村 好 郎

投句総数 三百九十九 句

入 選 五 十 三 句

産油国クシャミで日本風邪を引き

八 尾 夕 花  
奈 良 保 夫

晩酌の一合明日の油です

奈 良 保 夫

火に油そんな企み抱く女

堺 憲 祐

油に水そんな施政をくり返えし

交 野 茂 児

水と油そんな一人で馬が合

岡 山 た け 志

本当の心が言えないあぶら汗

兵 庫 可 住

一国の運命油に握られる

和 歌 山 紀 久 子

オイルショックに負けぬ商魂ドル稼ぐ

富 田 林 花 梢

忠告も恋の一通の火に油

大 阪 吸 江

潤滑油の役目背負って孫生れ

今 治 宵 明

瀬戸内の油の帯へ泣く漁師

油じむこの手家族の手綱とる  
尼 崎 千 子

手探りの海底油田にかける夢  
名 古 屋 枯 梢

大正の役目役場の潤滑油  
和 歌 山 三 男

油だけ浮き遭難の海静か  
米 子 花 子

油さすようちびちびと父の酒  
東 子 悠 泉

潤滑油として対立の外に居る  
倉 敷 素 身 郎

下積の油どぶろく酌いでいる  
倉 敷 里 風

作業衣の油へ妻として感謝  
伊 丹 寿 馬

油売る男なれども腕は切れ  
岡 山 七 面 山

しみ出る油と汗で築く城  
出 雲 栄

古代誌を包み伝えた油紙  
米 子 越 子

油汗かいて暮しの詩がある  
和 歌 山 頼 次

油臭い工場の隅に花一輪  
米 子 美 世

油さし油さしのぼる老いの坂  
同 居 する 孫 は くら しの 潤 滑 油

女の手もやす油は貴方かも  
和 歌 山 寿 子

一滴の油で愛の灯を点す

本心が鼻に出ているあぶら汗  
旭 川 大 柏

作業衣の油男を匂わせる  
富 田 林 優

定年が過ぎても油さしておく  
富 田 林 優

髪油匂う草書に艶がある  
大 阪 小 雅 子

燈心の揺れる光にある如来  
大 阪 小 雅 子

油など売れぬノルマにあるグラフ  
佳 句

労働の油のしみは隠さない  
大 阪 小 松 園

尽きるまで燃える油を抱く女  
京 都 笑 風

嫁のるす今日は油のないおかず  
大 阪 満 津 子

油さすつもりで飲んで二日酔  
寝 屋 川 あ い き

家の和へ潤滑油でおわす母  
西 宮 百 酒

勤続賞油が匂う手でつかむ  
富 田 林 優

人の句  
今 治 佳 雲

仲裁の酒が油になって燃え  
地 の 句

文明のもろさへ油きれてみせ  
米 子 千 代

天の句  
名 古 屋 曲 ん 手

さりげなく妻が差してる潤滑油

選者吟

汗と油だけで不況には勝てず

昭和五十四年度

ベストテン (二月現在)

- |    |     |     |
|----|-----|-----|
| 一優 | 九、五 | 富田林 |
| 二百 | 七、〇 | 西宮  |
| 三寿 | 六、五 | 和歌山 |
| 四美 | 六、五 | 八尾  |

- |    |     |     |     |    |     |     |    |
|----|-----|-----|-----|----|-----|-----|----|
| 五  | 千代  | 五、〇 | 米子  | 一四 | 満津子 | 三、五 | 大阪 |
| 六  | 花梢  | 五、〇 | 富田林 | 一五 | 笑風  | 三、五 | 京都 |
| 七  | 小雅子 | 四、〇 | 大阪  | 一六 | 邦晴  | 三、五 | 堺  |
| 八  | 曲ん手 | 四、〇 | 名古屋 |    |     |     |    |
| 九  | 真砂  | 四、〇 | 大阪  |    |     |     |    |
| 一〇 | 里風  | 三、五 | 倉敷  |    |     |     |    |
| 一一 | 大柏  | 三、五 | 旭川  |    |     |     |    |
| 一二 | 文秋  | 三、五 | 大阪  |    |     |     |    |
| 一三 | 弘生  | 三、五 | 大阪  |    |     |     |    |

昭和五十四年度第五回

「誤算」

締切

四月二十日

第六回

「階段」

三句以内

三句以内

切は二十日に変更します。おくれぬよう厳守して下さい。(好郎)

締切 五月二十日

投句先

〒593

堺市堀上緑町一ノ三ノ七

大萬川柳係

### 53年度・各地柳壇賞決定

若本多久志

昭和53年4月号から54年度3月号までの各地柳壇10選に選ばれた百二十句。これが無記名で来る。3月号が出ないうちに送って来るので、まったく氏名が判からない。

秀句一句、佳作10句をそんな中からいたした。(佳作は順不同)

#### 各地柳壇賞

遺影おがむ心を風が吹き抜ける 竹中綾女

佳作

肉眼が冴えて月夜の神を見る 香川酔々

借り物の帯に気疲れためている 江口度

傾いたままでもにらむ鬼瓦 小谷清女

人生を跳き通して酒がある 正本水客

石投げて波紋見つめている孤独 奥谷弘朗

衣紋掛つかれた型で今日終る 川上富子

平凡な父から学ふ事はかり 鈴木かつ子

縄のれん翔べない蜂が酔っている

美しく生まれ祇園の水に合い 高杉鬼遊

塗箸へこんにやく逆らう術を知り 正本水客

松川杜的

★▼第十回奈良新聞川柳大会 四月一日(日) 十時開場

会場は奈良市立中央公民館二階、元市役所あと猿沢池南(東寺林町三八)

#### 宿題

「さえずり」

「教育」

「期待」

「デスク」

「緑化」

「一と昔」

「発掘」

席題 二題(各題二句、締切十二時)

特別講演「仏さまのはなし」 松本楢重氏

会費 千円(呈記念品・発表誌)

主催 奈良新聞社・奈良県川柳連盟

#### ★

▼上海・長沙・桂林の旅 (私のアルバムから) 日中友好関西文化人訪中国写真展が3月1日、10日まで大阪淀屋橋サントピア・ギャラリーで開かれた。直原玉青先生も出品されていて好評だった。来年は三十周年記念になる。

▼第29集「吉備団子」が昭和五十三年度版として、川柳岡山社から発行。川柳塔社同人は多数参加されている。自選作品集だけに個性の強い句が楽しませてくれる。千円(送料三七円) 千七〇一・四二岡山県邑久郡邑久町山手一四四五 川柳岡山社。

#### ★

▼鳥取文芸(創刊号) 評論・随筆・詩・短歌・俳句・川柳・創作、と文字どおり「文芸」である。川柳には河村日満氏ほか、川柳塔社同人も多数参加されている。一〇八ページ・頒価八百円―発行所・鳥取市尚徳町―鳥取市教育委員会内―鳥取市社会教育事業団。





## 法名 徳相院柳篠栄照大姉

# 西出一栄さんの想い出

西田 柳宏子

見出すことが出来ない。

姉妹作家といわれた亡き酒田清子さんとのコンビも忘れられないものがある。妹さんの天逝は一栄さんには大きなショックだったようである。

私はエベッサンだんネと耳が遠くなられたことを笑いながらよく言われたことも懐しい。御主人が病気で入院された時の一栄さんの寝食忘れた介抱、一栄さんが入院された時の御主人の心遣い、傍目もつるわしいものがあつた。虫が知らせたか今迄素直な一栄さんに似ず最後の入院には猛烈に駄々をこね、反対しやつと御長男御夫婦の説得で入院されたそうである。

喜びにつけ悲しみにつけ、川柳を愛しつつけた一栄さん、又それを御主人始め御家族の皆様方が温かく見守り励まし続けて来たことは一栄さんにとってはどんなにか幸せだったことでしょう。川柳を心の支えとしてどんな時にも、亡くなる直前まで作句しつづけた一栄さん、その句帳には既に川柳塔、愛染帖、

南大阪へ 投句用がギッシリ書きこまれているのを拝見して自ら頭の下がる思いでした。葬儀はどんどろ大師で知られる善福寺、お人柄を示す弔門、会葬者の数は三百人を超えていた。

法名 徳相院柳篠栄照大姉

祭壇には昨年十月自ら葬式用にと写された写真が飾られ、栗先生始め南大阪の人々や俳句の岡田白揚先生等の弔吟が供えられていた。一栄さん安らかな御冥福を祈ります。路郎先生、白柳さん、そして清子さんとも再会していることでしょう。

合掌

姉妹 再会してる雲の峰 祭壇に供えられた弔吟 柳宏子

栗

文 秋

あいき

千 梢

柳宏子

一 山

白 揚



付記

○西出甚吉氏（夫君）……川柳では甚也

○二男一女

○西出洋一氏英子様（長男夫妻孫男三人）

○西出祥次氏由子様（次男夫妻孫男女二人）

○上田洋子様（長女、孫女三人）

○一栄さんの御実家は富田林の写真屋さん

○又一栄さんと葵氏の姉さんと同級生とは奇縁（旧河南高等女学校）

○教育熱心な一栄さんは祥次さんの想い出ではモグサと火のついた線香をもつて勉強の監督をされたとか……

○昨年一時いわゆる老人呆けの症状になり、

川柳も作れなくなった時御主人や御家族の人より、川柳を作らなあきませんよと励まされて、再び作句しはじめて老人呆けを克服されたとの事。

☆

○葬儀参列者川柳塔関係一葉・小松園・薫風・形水・文秋・岳人・酔々・滋雀・喜風・あいき・綾女・宏子・智子・君子・千梢・葉子・柳宏子・恒明（敬称略）

☆

# 三月号の初校の ゲラがまに合った

不二田 一三夫

三月号の初校へ赤のボールペンを握ったと

き、座石の句「へ宮本茂児さんが、一栄さんの。人間が人間の道行くむつかしさ」を推されていたし、二月の本社句会で欠席投句四題四句入選という拔群の成績だったので、あと十日間もすれば、三月号が一栄さんのお手元へ届くのに、虫が知らせたというのか、校正の手を止めて、その目次の初校のゲラ刷りの余白へ本社句会の入選四句を走り書きで送りした。

一、三日してから代筆で「こんなにうれしいことはございません。それにしましても宮本茂児さんという方はまだ存じ上げておりませんのに……」このようなお便りをいただいた。

三月号を二十六日に発送して、二十七日の朝、智子さんから悲しいお知らせをうけた。

その夜、南大阪の人たちと、一栄さんのお宅へお別れに参上したが、三月号はついに一栄さんに見えていただけなかったのである。

あの初校のゲラ刷りをお送りしなかったら……一栄さんは「座石の句」に推されたことも、四句入選も知らずに旅立たれたのである。

本号の一栄さんの遺句の中に、

——クラス名簿 鬼籍の友をかぞえいる

——というのがある。人生って悲しいものだ。

——スペースのゆるせるところまで、これから一栄さんの句を拾っていくが、麻生霞乃先生は「一栄さんほど、大らかな句を発表する人はすくない。」と云われたことがある。

「川柳塔社刊・同人句集」の十八句は、よく

が選らせていただいたが、一栄さんにはユーモアたっぷり句が多い。

——添わしても根メの花はあっち向き

——来客へギョウサのように子にはならび

——胡瓜と茄子どつさり漬けて心満つ

——月花 虫 野仏うれし秋の夜

——末っ子も果立ちざしうらははぜたまま

——やわらかな陽射しへおしめ解いてやり

——主治医と家族で箱入婆にされ

——心臓の機嫌とりとり京の街

——混浴へタオル一本たよりにし

太閤閣にて

——金婚を祝われて功無きを恥す

——麦わらに差した首にも美女を選り

——体重が足の負担へ気兼ねする

——子に孫にソロソロやつとく生き形身

——難聴の気疲れ人様知らぬこと

——不足ない年でこの柄地味よろか

——へそくりでうつかり夫のものを買い

——病院呆けうたを忘れたカナリヤか

——付添いが先生の云いつけ守りすぎ

——家風に合わぬと人の育てた娘に文句

——呼ばやいてばやいて姑すつとしたらしい

——鯉呼べば水に五重の塔ゆれる

清水白柳先生遺

——師なきあと心貧しき日がつづく

——樽取ればおろぎうろたえるうろたえる

——臨月へバトカーのことも云うておき

——厄介なことに年子になりそうな

——糸こんにやくふるえて袋につめられる

——着ぶくれて文楽人形思わせる

## 柳界展望

(原稿締切毎月末)

「相對死おんなは多く血を流し」ほか「児玉怡子」。

▼川柳と自叙「還暦の抄」金子善太郎著という変形版

(谷町・千亀利)の川柳と隨筆集。序文「深野吾水・山根白星両氏。表紙絵と句を水粉千翁氏が書いておられ。一頁十句、三十ページへ千翁氏の麗筆が見事。隨筆も軽妙で楽しい。発行所山口県下松市平田西一金子善太郎」

▼野口北洋氏(柳宴)亡きあと初枝夫人が会長、田中明二氏が主幹(既報)副主幹に市川鱗魚氏、「相談役」に東野大八氏と決まる。

▼小泉紫峰句集「老猿」が昭和五十三年十月十五日発行された。大正十三年に野辺地川柳会に入会されてからの活発な川柳活動で昭和三十三年には第一回八戸市文化褒賞を受賞されている。第三句集「老猿のたけたる知恵で無事納め

▼若本多久志氏(西宮市)はこのほど、揭示訓(前・後篇抜粋)「人づくり」という本を出版された。さきに「揭示訓」を発売、かつての社長時代、会長時代、社員に訓示された名言集の続篇ともいえる。非売品)

▼橘高薫風氏(豊中市)は構造社の川柳全集「麻生路郎」を脱稿。四月下旬に発売予定。定価千円、送料一六〇円。東京都世田谷区三軒茶屋二一九 構造社出版株式会社(川柳塔関係の全柳人、こぞってご愛読のほどを)

▼八木摩太郎氏(堺市)から「読売新聞大阪本社から長寿の秘訣を聞きにインタビュを受け「頭をつかえば年はとらない」この記事が掲載されました」。

▼野村太茂津氏(和歌山)から「水煙抄で活躍組の誌代が切れた人から同人として紹介していきます。七名の子定です。」

▼小出智子さんと河野君子さんを中心にして生野勝山で、初心者ばかりの奥様族

からの要望で句会を作る計画を立てておられる。

▼三井醉夢さん(香川県)から「五月三日に娘が結婚。皆さんの四回上陸と日が重ならなかったのでもってしております。」

▼神谷凡九郎氏(大阪市)から「長女が二月十一日に結婚。五つ年下の二女は三年前に結婚して、あと長男が残っています。」

▼出原敬一氏(岡山県)は「川柳清流社副主幹として活躍中。柳誌も八十八号を迎え、会員百名突破を目標にされている。」

琉球大学教授辻合先生の指導で琉球焼の勉強しています。一羽の沖繩にきて初夏の風(二月九日吟)

▼4月の句会 ▲菜の花句会は十日(火)夕六時から西郷会館(八尾神社境内)で開催。題は「蝶・主人・苦しむ・先祖」席題二題各題五句以内。投票百円同封。投句先「大路美幸宛」

▼堺川柳句会は十二日午後六時から摩太郎居で開催。題は「添う・あまる・司会・出しぬけ」

▼南海川柳会は十九日六時から南海電鉄本社食堂内で開催。題は「タイムカド・献血・弱味」

▼南大阪川柳会は二十日午後六時から松崎町三丁目大萬で開催。題は「失格・コラム・台本・スケール」

▼東大阪川柳同好会は二十八日午後六時から東大阪市中央公民館2F、近鉄永和駅前東。題は「成功・交代・和服・きらきら」

## 新同人紹介

宮 園 瑞 穂

操子・栗・酔々・推薦

# 本社 三月句会

会場 金属会館

七日 午後六時

柳話の小松園氏には申しわけないが今月もスベースがない。お話はスケールの大きい、聞きごたえのあるもの。題して「よもやま兎糞録」皇族・女王殿下。源氏物語の光源氏。十戒のモーゼから宮武外骨のオトナ用の話など。詳しく書けば発禁物である。

今月の月間賞杯は生々庵主幹にかがやく。

(受付) 児島与呂志・金井文秋  
(進行) 西田柳宏子・記録・高杉鬼遊

## 席題「損」

村上 春已選

すき焼を喰べる胃袋小さすぎ  
儲かっている話に損を計算す  
損しても次の布石は打っておく  
返品の上に運賃着払い  
損得をいうから男見くびられ  
合理化へ欠損先に出して来る  
損をする男の肩が落ちてくる  
損をする苦が儲けている怖さ  
野菜暴落農家に寒い春の風  
善人は損な立場に馴らされる

岳人 規不風  
みすほ 以兆  
栗 蘭  
雀踊子 寿馬  
吸江 弘生

人情家のレッテルそれから損ばかり  
献金をして損を考える

損ばかりしている男山が好き  
損得を度外視させる義理があり

損得をはじき老舗で曲る腰  
損害賠償一とサジ盛った診断書

損を繕う社長のカツ葉服  
拍手して損したような義理がある

人間の弱き損得勘定する  
損ばかりしながら人間性を説く

損をしても一笑に付す土地がある  
半眼をひらいて損をにらんでいる

賽銭が損だてと神へ近づく  
黄色い損が鈴なりにあるみかん山

ボヤで済み弥次馬損した顔で散り  
仕入れ値を割ったと泣いて売りまっせ

損得を言う子の夢に彩がない  
大損へええ勉強になりました

損得のない道をいく定期券  
損をしたことに笑顔で触れさせず

損のれん損な役目をねざらわれ  
ラッシュアワーみんな目的もっている

目的の地近くさわめく観光船  
目的に遠くバイトの朝走る

目的がいつの間にやらすり替わり  
目的の階段いっきに駆けのぼる

目的を達成してから狂いだし  
目的をさくら手段が鬼にする

目的へ時々居眠りしたくなり  
人情家のレッテルそれから損ばかり

献金をして損を考える  
損ばかりしている男山が好き

損得を度外視させる義理があり  
損得をはじき老舗で曲る腰

損害賠償一とサジ盛った診断書  
損を繕う社長のカツ葉服

拍手して損したような義理がある  
人間の弱き損得勘定する

損ばかりしながら人間性を説く  
損をしても一笑に付す土地がある

半眼をひらいて損をにらんでいる  
賽銭が損だてと神へ近づく

黄色い損が鈴なりにあるみかん山  
ボヤで済み弥次馬損した顔で散り

仕入れ値を割ったと泣いて売りまっせ  
損得を言う子の夢に彩がない

大損へええ勉強になりました  
損得のない道をいく定期券

損をしたことに笑顔で触れさせず  
損のれん損な役目をねざらわれ

ラッシュアワーみんな目的もっている  
目的の地近くさわめく観光船

目的に遠くバイトの朝走る  
目的がいつの間にやらすり替わり

目的の階段いっきに駆けのぼる  
目的を達成してから狂いだし

目的をさくら手段が鬼にする  
目的へ時々居眠りしたくなり

与史

規不風

岳人

庸佑

右近

一三夫

としよ

太茂津

与呂志

寿馬

与史

酔々

君子

百馬

百酒

三十四

君子

花梢

小松園

春已

久保田以兆選

度

右近

春已

柳宏子

百子

百酒

夕花

夕花

夕花

目的へ一直線に翔ぶ若さ

目的に近づく話題になってくる

目的へ遮一無二貯金したくなる

阿呆になる男目的の持っている

目的へ朝の口笛のつてくる

目的を果しそこねたコップ酒

長い坂目的だんだんばけて来る

目的がわかると女逃げてゆく

目的が同じと知ってから敵意

目的をラッシュアワーに詰めて行く

目的の地遠くはずれて酔いつぶれ

盗ませる目的の昏塗りあげる

目的は十九の胸に秘めておく

目的が済めば素通りする鳥居

目的を持つとき風がきつうなる

味方から先ず目的をくらませる

目的があるので酔いが廻らない

妹が結婚してから来なくなり

目的は立派手段が法に触れ

目的へ男しすかに瓜を切る

目的があるから最後まで残り

兼題「幼女」

高杉鬼遊選

幼女もう鏡の前に座る癖

いじわるをしようとして告げ口する幼女

美人になると約束された七五三

母のない幼女は白い鶴を折る

ママ事の愚痴を人形は聞き馴れる

童女描く岸田劉生の眼涼し

ふくれたり泣いたり二つでもう女

寿馬

小松園

としよ

雀踊子

花梢

柳宏子

みすほ

あいき

柳宏子

和子

生々庵

太茂津

潮花

与史

凡九郎

古方

綾女

鬼遊

百遊

涼一

春已

洋敏

栗

静馬

枯梢

優

弘生

千代三

あいき







式場は厄日だけしか空いてない  
鼠取り行きも帰るも引つかかり  
日記帳厄日に埋める文字がない  
激突の車で護符が揺れている  
名騎手の厄日を馬は知っている  
不渡りを喰うは税務署が来るわ  
たかられて昔のツケまで払われ  
風見鶏厄日の風に矢を放つ  
足踏まれ痴漢にされた満員車  
厄日など解せず谷川岳が好き  
仏滅も二人の愛に押し切られ  
厄日もかも知れない聴診器不安  
財布もつ妻と盛り場ではぐれ  
不渡りが二枚銀行から電話  
クリスマス母の財布が空になる  
若者の暦厄日が見当らぬ  
わたしには夫の逝つた日が厄日です  
毎日が厄日失保の職探し  
厄日とは妻に出会いし日のことか  
私なりの厄日で花など買ってくる  
ライターの油も切れている厄日  
身から出た錆の厄日に甘んじる  
嫁ぐ日は父の厄日も知れず  
人間の弱さ厄日にしてしまふ  
流れ矢に当たる厄日は不意にくる  
善人へうら目うら目と出る厄日

兼題「お水取り」

戸田

古方選

お水取り京の都の息づかい  
霜やけの母が気になるお水とり  
春煙り出す韃靼の火の踊り

千代三 登美也 優 規不風 鬼遊 弘生 度 みずほ 小路 洋敏 与呂志 弘生 以兆 あいき 定男 綾女 鬼遊 涼一 花梢 醉々 滋雀 君子 花梢 雀踊子 吸江

お水取りに合わせたように風邪を引き  
ニユーニユーシタ耳にして待つお水取り  
お水取り火のこのかぶる所に立ち  
福水洋一が気がかりなお水取り  
あきらめの息吹きかけるお水取り  
お水取り女神の心も融けてくる  
二月堂火事にならないのが不思議  
お水取り祖母の頭が湧えてくる  
荒行をおえた二月堂白みたり  
お火取り行の水を汲んだ春  
お水取り耶馬大國の春つげる  
お水取り尼は見物側に立ち  
お水取り今年も別の人と行く  
老いの身をお水取りまで身構える  
水取りがすんでからという法事  
お水取り済んで鹿の声変わる  
コート脱ぐその日も近しお水取り  
お水取り奈良に生まれて奈良に死ぬ  
お水取りあしたの暖さを疑わぬ  
お水取りおわたとしもやけかゆくなる  
お水取りすめば故郷から母を呼ぶ  
お水取り埴輪のぐるり風があり  
熱いとも言わず火の舞うお水取り  
お水取り小雲に心の底を見る  
お水取り良弁杉の由来きく  
(河井庸佑・整理)

追記▲句会のはじまる前に故西出一栄さん  
へ一分間の黙禱をささげました。

小浜牧人一周忌句会

日時 四月十五日(日) 午後一時から  
場所 広田山荘(広田神社境内) 阪急  
西宮北口から甲東園行きバス10  
分、広田神社前下車。

司会 山岡半歩

柳話 若本多久志

兼題 「やさしい」 朝山千世子選

「紳士」 樋口舟遊選

「菖蒲」 室田千尋選

「思い出」 堺谷伊升選

「旅」 西尾栗選

(各題三句)

会費 三百円

終了後故人を偲ぶ宴

会費 三千円

主催 西宮北口川柳会

皆様のご出席をお待ちします。

# 老地柳壇

▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。十七字以内の句に、下三マスに雅号。

## 川柳たけはら

森井菁居報

花嫁の方はアップにたじろがす  
嬌声が哀し女の生きるの街  
亡母思う夢また夢の中に追う  
浮気してよいかと妻に聞いてみる  
ちっちゃなちっちゃな門松でよい若夫婦  
人間の出逢い豊かな雲がある  
止める者もない晩酌の量が増す  
飯面がむればおもしろい世の中で  
糞虫の下がる小枝はおいてやり  
もう一つの顔で先生バーへ行き  
あるときはわかる気もする酒びたり  
追伸のほうに本音を添えておく  
欲のない花一つ咲き一つ咲き  
俺だけが頼りとおもふ風の中  
さくら茶を入れる芽出たい秋陽さす  
ストロブの真赤な色は春の色  
リンスしたら私は花のようせいね  
生々流転何が待つやら羊歳  
自画像の輪郭少し濃ゆくなり  
我慢した拳理性を取り戻す

静水 洋之祐 笑子 文晴 蘭幸 不朽 松緑 政己 房子 敬子 西合 寛子 鈍舟 菁居 貞子 小六愛 小三のり 節路 英詩

伴せに馴れて感謝をつい忘れ  
南大阪川柳会

中川滋雀報

不覚にも子の傷口にふれていた  
一生の不覚となった其白髪  
衰虫の切られる枝にいたる不覚  
酔いつぶれた前後不覚を運ぶ下戸  
とまり木に帰る父の顔になる  
エリートのとまり木夢が大き過ぎ  
とまり木へ仕事の憂さを置いてくる  
民宿の饗昔は武家屋敷  
民宿の玄関にある耕運機  
隣にも隣の夢のある日暮れ  
お隣りはお隣り我が家パンを焼く  
お隣りの鰻が匂う妻の留守  
東京の今どまん中に立つ若さ  
髪染めて残る若さを追う鏡  
打てばすぐ響く若さが好きになる  
飛び込んで池の深さを知る若さ  
幸は多忙をぬけたお茶の味  
忙がしそうだねと税吏が云う恐さ  
多忙さの中に本当の静が住む  
川柳ささやま 河原みのる報

かつ子 君子 好一 勝美 綾女 雀踊子 喜風 弘生 三十四 醉々 雅風 憲祐 一二三 あいき 小松園 静香 久子 度雀 滋雀 文秋 凡九郎 文平 絹子 孝山 越山 ひか平 テル 竹堂 百合子

色あせたのれん歴史を吊る老舗  
新鮮な味忘れず友を連れ  
筍の掘る間も遅し旬の味  
新鮮な嘘ポケットに詰め帰り  
新鮮な恋は卒業式を待ち  
団体へ心を閉じける京の寺  
団体にはぐれバツジが泣いている  
川柳後楽(岡山市) 井上柳五郎報  
古稀の道妻は苦節を語らない  
古稀うれし酒の女神と手をつなぎ  
恍惚の人になるまい古稀の酒  
ベレー帽被れば古稀が若返り  
幾山河喜怒哀楽の古稀を生き  
古稀なものはいつのまにやらすんでいた  
悲喜交々辿って古稀の賀酒に酔い  
鶴亀と五葉の松で祝い唄  
祝い唄はずんで入歯踊り出し  
狼が集い落成式祝う  
栄転を祝うその目にねたみ見え  
祝電を以下同文で切り捨てる  
金婚式祝ってあげたい努力賞  
新郎の祝詞は馴れ染めつい抜き  
新郎をビクリとさせ祝辞いう  
言葉など要らぬ重た手の温み  
握手したぬくみ味方と信じきり  
手鏡の中に断ちえぬ思慕つるの  
明日のこと風にまかせてふところ手  
揚げぬ手に母が焦らだつ参観日  
打おろす手もとが狂う自己過信  
手の内は読めているのに食いさがり  
我慢した美貌少々嫁さおくれ

ゆきお 貞子 みのる ゆう也 可枝 木住 とも子 芳明 照路 正郎 哲郎 三柳 ひろし 梁谷 幽吾 昌吾 鮫虎狼 正道 胡風 廉丘 葵大 武夫 夏彦 草風 惠美子 元一 佐加恵 恒洋 博友

真直ぐに生きた事だけ自慢でき  
自慢する十八番を先に歌われる  
おだやかに自慢の鼻をへし折られ  
魚のいる川が流れている自慢  
三代がともに暮している自慢  
歩くことだけが自慢の足の裏  
あっちこっち耳が待っている火傷の手

オエスケー川柳会

大坂形水報

不況風寒い話題も年の暮れ  
銀嶺へ寒さ忘れに行く二〇才

派手になりウールを娘に着せてみる

客途切れ途切れて寒さしみてゐる

蹄鉄に明日の王冠乗せる馬

メロドラマ終る目がしら父権なし

吊り革につかまる姿が疲れてる

寒くない日にもアベック肩を寄せ

どんな子になるか試験管ベビー出来

振り向いてしまふと終りが待っている

ホステスが着たらホステスになるウール

年末に残業のない寒い夜

不況にも終りを告げて欲しい鐘

西高東低ふぐちようにに呼び込まれ

懐の寒さは笑顔で切り抜ける

テトロンへウール巻き返し策計る

金持が札束よむと寒くなる

オーバーを着せかける手に知る温み

一代で終る陶師が土を練る

川柳化粧櫓

還暦の祝いむかしを口にせず

背のびしたやあ笑ったと若夫婦

恋人にまかせた柄を今日も着る

植村客遊子報

秋月 柳五郎 柳五郎 久米雄 孝柳 九坡 定平 千夢 博泉 重也子 一扇 秀川 光男 庄一郎 幸坊 前田 一念 聖地 野成 亜成 度成 形生 弥生 入仙 好郎 岳詩 秋月 実男

のりを炊く鍋に年期のつやがあり  
出稼ぎの父を待つてゐるぼたん鍋  
冷凍のかにと鍋だけ知っている  
薬のむ日課となりて背広着る  
ゴム足袋をはいた蕎麦職を舞う  
売約の赤札の名を見て廻る

菜の花

高杉鬼遊報

黙って坐つたのに予言当らない

凡人のブライド作業衣だけが知る

押えたら家出か自殺しかねない

ブライドをつくと指輪一つ売れ

勤にぶい女は幸せかも知れぬ

予言者が大きなナマス飼っている

尺取虫石橋叩く人に似る

達筆の便りを勸で理解する

言いきつた予言なんだか当りそう

尺取虫メートル法の風にゆれ

予言には惑わされない酒の味

美容体操尺取虫の真似もする

おふくろの予言で傘を持って出る

心中のブライド香を焚いている

嬉しさを押えて見合かしこまり

土瓶割れ尺取虫は横を向く

河内弁同士で話よく判り

聖書這う尺取虫は救われ

予言者の家で盗難届けあり

仔を産んだ猫の話をしき違え

どんぐり川柳会

谷垣史好報

秀才と交換すると損になる

材料の不足を腕がカバーする

社の不振 交換台は知りつくし

奮水 越山 紅葉 永楽 客遊子 壽馬 鎮彦 恒明 文秋 雀踊子 綾女 みずほ 頂留子 小松園 柳伸 鶴声 夕花 酔々 豊生 幸美 秋幸 昭幸 鬼遊 好郎 真砂 美幸

材料を聞いた途端に箸を置き  
住めば都波止場のあひるは海泳ぐ  
あれだけの材料使つてこんな出来  
会話なき茶の間の外であひる鳴く  
上を向くことも知っているあひる  
またもめる材料叔母が持つてくる  
あひるなど住めぬ千代田区一番地  
とつておきの材料輪転機がはずみ  
みにくいとおひる自身は思つてず  
あひる艦隊大きな波に乗りきれず  
坂道で息切れをしているあひる  
材料は吟味と銭を匂わせる  
両替機出つくした音で金が出る  
スマートに歩くあひるは非難され  
おしとやかに歩けば歩くほどあひる

川柳しんぐう

川土大輪報

冬花

佳句地10選

(前月号から) 藤田軒太楼選

親切を勧繰る程の情に飢え 希久志  
再婚へ愛のかけらを継ぎ合わせ 喜風  
順番を変えねばならぬ花輪来る 好郎  
ルールを破るとも楽しい隙がある 太茂  
宿敵へ返えす盃かけている 岳人  
手の届くところに落ちてた鼻薬 度々  
長い目で見てます晩成疑がわず 洋々  
初春たのし成人の子に見おろされ 紅月  
肥満体骨まで愛しても言えず あい  
泣くときの男がかぶる獅子頭 耕草



南から日本列島花だより

日本の童話貧しい子に味方

日本のむかし空を風が呼ぶ

移民者の墓標は日本の空に向き

日本の伝統古都に生きている

日本をウールが包んだお正月

日本の姿今日も遍路の鈴が鳴る

今日の苦をみんな忘れて福わらい

初えびすくまになんて福笑い

福笑いわらいの渦へ落けている

福笑いに心の貧しさわられる

福笑いわらう心に福を抱く

何もかも白紙に戻すむつかしさ

潔白へ手錠をかけた時の風

白黒のつかぬ灰色多すぎる

白無垢へ永遠の幸せ信じきり

徹夜して白紙に戻す仲人役

紅白の余韻へつなく除夜の鐘

夢一杯白いい日記に溢れてる

川柳わかやま

津田与史報

鍵っ子へ道をそらさぬメモがある

二階にも鉢が小さな春を待つ

男一匹女の匂いに縛られる

二枚目でないが澄んだ瞳持っている

肩かごのメモが真相喋りだす

メモ帳へ春が遊山を書き込まず

一片のメモそれからの家庭不和

盗み見たメモから悩みだけ貰う

倦怠期二階と下で朝寝する

寿子

十郎

幸子

雀踊子

溪水

与呂志

女

勇太

すみれ

大輪

富子

弘生

としよ

武雄

正治

まさ子

古城

三千代

千寿子

千寿子

登紀夫

太茂津

幸雄

公子

英子

きみ

紀久子

光代

女

お二階を借りて表札小さくあげ

良い話二階の耳が降りてくる

そこはかと女が匂う江戸小紋

はのはと匂う歴史の古都歩く

きよう一日生きたあかしが匂う汗

春匂う陽気に老いが背伸びする

梅一輪匂えば停年近くなる

二枚目を連れた娘おごらされ

二枚目は二枚目同志つき合わず

南海電鉄川柳部(大阪市)辻

出向役員もう一年はもたぬ首

出向へ独身寮をあてがわれ

毎日が最後と出向社員覚悟する

出向から帰ると居場所に落ちつけず

整理よりまだと出向に耐えさせ

長い出向本社は忘れられ

来て見ればわが世の春の出向員

腕見せて来いと出向辞令受け

出向へローンの家にある不安

差益還元庶民の声によりきられ

片手間の菜園うるおす台所

片手間のしゅうを趣味にされており

川柳大阪

兄島与呂志報

たくましく生きてゴキブリ憎まれる

労働の汗したたかに匂う服

勇気ある発言からの風当たり

作業服に換えて仕事の顔となる

取れそうなたんぽうにのぞく倦怠期

金策の今日へ不吉な雨となる

純情を売り物にして嫁かず後家

弘生

弐子

和子

天彦

三男

与呂志

寿美数

勇太

与史

水報

摩太郎

圭水

小松園

綾女

雅風

誓二

朝子

与一

勝美

宏子

清女

柳信

京介

真佐志

道子

弘生

重人

洛醉

胡蝶

比呂志

純朴だから服装を気にしない

こころ一番勇気へふんどし固くしめ

今日は飲むつもりマイカー置いて来る

坂道を妻に押されて登り切り

ケチンボの人生銭の音がする

独身寮シャツのボタンは取れたまま

ジグザグに坂道登る夏の午後

白髪に濃いた餅に人生狂女という

絵に画いた餅に人生狂女という

手のとどく距離で逢えない日の多く

冬の朝風託のない声笑い合い

川柳塔まつえ

恒松町紅報

祖母の瞳にうつる無礼の吹きだまり

横文字に弱い父さん戦前派

人間に戻る横丁の縄のれん

病よし横を向かせて春を見せ

計画もくなくサラ金で穴を掘る

女三人計画たてる旅野金

横を向く顔は妥協をゆるさない

答弁は無礼に耐えてございます

計画の途中で金が欠伸する

古いと云われても横書きになじめない

計画のバランスに隠し弗がある

暖冬が古里の計画狂わせる

倉吉打吹川柳会

奥谷弘朗報

年金は収入外とみんな呑み

平気にはなれぬ拳がふるえてる

垣の外手頃な枝の柿盗られ

社会の密明けて平気な呑気者

眉水

秀峰

雅果

希久志

笑風

三十四

敏

本蔭樺

佳加志

君枝

与呂志

虎

秋

愚童

早苗

新雪

巡月

祥月

雪美

緑之助

登美也

鶴丸

孤呂二

町紅

弘朗報

秋草

独歩

碧水

いさみ

石花菜



性分が平気でうそのいえる人  
出雲路を妻と手頃な族終る  
自腹切った創を内助が手当する  
再婚も手頃どちらも子がひとり  
平気とは言つて居れない血が騒ぎ  
よとみなく和服作家のインタビュ  
選挙もう近い目あてで切る自腹  
優勝に監督自腹切った酒  
この上は自腹で飲めとそつ気なし  
平気だと云う手の茶碗ふるえてる  
偽りを平気で言つて自己嫌悪  
王手飛車ここは逃げ道切り開き  
逃げ道を開けて追ひ出す豆をまき  
二三合平気で飲めるまでに癒え

# 東大阪川柳同好会

斎藤三十四報

花笠の花飛んで来たかぶり付  
辻棲に疑問を抱くゼロ一つ  
首すじが寒い師走の髪を刈る  
竹箒尼僧は秋を掃き寄せる  
竹の葉のささやきがあり隠居部屋  
竹に似た一直線の人恋し  
簾竹に頼る悩みが多すぎる  
竹やぶの向に描くユートピア  
枯れ山水竹の青さに生かされる  
竹割つた気性で女に惜しまれる  
日本の青色尺余の竹がたす  
折りもつ手に竹筒の水が満ち  
温い余生に緑がこぼれてる  
血圧が気になる太い首まわり  
鬼の首取つて置場に困る破目  
辻棲を合せ過ぎてて疑われ

みやび 枯葉 弘生 自然 夕路 雄々 おさむ 笑王 俊子 御前 観洋 舍人 弘朗 翠公 勝美 孤舟 信治 滋啓 益考 三十四 柳信 雅風 文秋 かずを 竹光 慶三 川狂子 弘生 綾女

辻棲の家計にママの手内職  
奴隷かも重い鎖を首にかけ  
辻棲を合わすと嘘になりました  
母の背の温みを思ふ悔いひとつ

川口弘生報

喜風 良教 雀踊子 湖風

貧すれば夢の中で金握り  
お別れが言葉にならず手を握る  
金握る手相と云われ五十年  
いつまでも握った感じ捨てないで  
心とは別に握手の顔をする

わか 和美 和宏 秀市 富子 フクヨ 知世 勇次 周穂 晃 三幸

# 城北川柳会

姑が来て油料理に氣を使い  
やさしさで水と油が添いとげる  
油絵の裸婦に母さな布をかけ  
嫁の留守今日は油のないおかず  
東京都椿油を造る島  
油売る奴とひそかにマークされ  
台所油のシミも三十年  
タコ焼の油引きから子は見つめ  
太陽を背に労働のあぶら汗  
何処からか風が運んだ油の匂い  
老いてなお油気のある爽やかさ  
油にも色々あれど食用油  
油くさい匂い運んでババ帰る  
寒風の火事は油がもとになり  
一合の油は明日の活力に  
天婦羅屋揚げつつ食べる五味八珍  
火にも油をそいで噂広くなり  
新しい比翼の鳥は天馳ける

中筋三幸報

喜風 良教 雀踊子 湖風

吾が輩は猫であるとのすまし顔  
酒もつてこい仲居の足も酔っている  
緑がわに猫ながながと春近し  
茶碗酒怒り易きは泣き易く  
鈴ならし小猫我が尾を追ひ廻り  
猫の毛の付いた座布団押し出され  
一票の握手は力も入ります

喜風 良教 雀踊子 湖風

# 和歌山七面句会

吾が輩は猫であるとのすまし顔  
酒もつてこい仲居の足も酔っている  
緑がわに猫ながながと春近し  
茶碗酒怒り易きは泣き易く  
鈴ならし小猫我が尾を追ひ廻り  
猫の毛の付いた座布団押し出され  
一票の握手は力も入ります

中筋三幸報

喜風 良教 雀踊子 湖風

弾き語りで唄いつくせぬ過去をもつ  
家運隆盛子に恵まれた屠蘇の酔い  
再会を喜ぶ友の手がぬくい  
大小のないお祝いの鯛を焼き  
飾られた言葉の裏のおとしあな  
バラ一輪胸に新婦と言う姿  
荷飾りの空に冷たい陽が一つ  
喜びの日のアイロンがききすぎる

喜風 良教 雀踊子 湖風

# きたぐち句会

朝山千世子報

弾き語りで唄いつくせぬ過去をもつ  
家運隆盛子に恵まれた屠蘇の酔い  
再会を喜ぶ友の手がぬくい  
大小のないお祝いの鯛を焼き  
飾られた言葉の裏のおとしあな  
バラ一輪胸に新婦と言う姿  
荷飾りの空に冷たい陽が一つ  
喜びの日のアイロンがききすぎる

喜風 良教 雀踊子 湖風

# 金一封

故西出一栄様のご遺族から本社の  
発展費としてご寄付がありました

川柳塔社

冬の丘を越え喜びがやって来る

古里に残る屋敷は父母の墓

相変りませずと医者に云いそびれ

淋しさは喜寿の宴のあと独り

寡婦一人終りの旅は飾りたい

松の内過ぎる前園の欠けたまま

成人を飾る香水など要らぬ

娘をかざる母いきいきと若返り

前歴の良さが就職妨げる

もとの道へ戻る気はない逃亡者

うみなり川柳会

小林由多香報

爆弾の実験南の海汚ごす

腹へってから起き出す日曜日

ストリップ腹のたるみは笑えない

一人者隣が気になる新世帯

あやまちも軽く見すごす新世帯

新世帯日曜訪問遠慮する

臨月の腹中心に家が舞い

腹のよい妻で喜寿まで添いとげる

正装をしたのに腹がかゆくなり

焦れてる折目正しい鶴が出来

弁明に傍聴席の方がじれ

子に甘い父の無口に焦れる母

焦がれてる標的グラグラよく動き

真剣な手話焦れたいいじれった

だしぬけに母と呼ばる過去あはく

だしぬけに従姉の死を聞く雨の朝

だしぬけの風に踊った流転劇

だしぬけのパンチリングに夢が散り

だしぬけに父が帰って来た不況

千尋

總甫

喜甲

摩耶子

とし女

薫風

寿馬

政甫

静馬

めぐる

とみ枝

華子

無人

幸雄

ツル子

とし江

舟宏

吟月

正子

栄子

笑王

貞山

帆雀

由多香

希満子

富美湖

雄人

盛桜

熊生

洋々

京都塔の会

松川杜的報

お年玉わからぬ児等へも用意する

他所さまの歳暮あずかる印を押し

皿そばの皿にもはいる牡丹雪

暖気樽に杜氏の手型がついてそ

う野火消えて丘静謐が欲しくなる

約束の時間へ時計容赦なく

げんまんを信じて熱の子が眠り

指切りへ男と女が酔うている

指切ゲンマン童話の色で日が落ちる

それから記憶が消えた千鳥足

それからがテンヤワナンヤの無礼講

それからがだんだん不幸になるドラマ

老松の瘤に年輪しかと見せ

松林ローカル線は吹雪いてる

障子紙松葉を入れて母と張る

川柳高知

その昔魅力があつた姥桜

冬山の魅力が怖い記事に合

景品の魅力に負けて無駄を買

百姓に魅力などない子に育ち

童心に帰る童話を孫と読む

童話読む孫と二人の平和な日

上の子が祖母の童話の先をとる

赤鬼の演技やつぱり憎めない

泣きみそへ童話の鬼を連れてくる

思いきり鈴をならして七五三

病人の気まま看護も医者も聞き

捨て犬が尾を振っていて逃られず

三ヶ日女ひとりの身を余し

美穂

潮花

和友

紫香

水客

客遊子

誠史

飛鳥

万的

耕三

三求

白漢子

杜的

求芽

芳子

紀人

朱坊

菊野

節子

晚耕

麗子

芽十

秋翠

ヒサ

窓花

蟠蛇

恭一

マコ

泰章

若本多久志著

川柳「続・老いの坂」

句集

中島生々庵主幹 若本多久志氏の吉報

として、第二句集の発刊準備完了という

以て壮とすべく、その発刊が待ち遠しい

(新春句会の柳話から)

序文 中島生々庵

—七月六日発刊の予定—

高橋操子著

川柳句集「千亀利」

千五百円・送料共

川柳新聞から一生への情熱が川柳作品

に反映されて読むものに感動を与え、生

きることの喜びを教えてくれる……

借金があるから自殺など出来ず

合掌をすれば十指の素直なり

発行所 川柳塔社

—

—

—

—

—

—

表札の一字とられてツバメの巢  
風上に常に位置する風当り  
氣を乗にお持ちなさいと羊の目  
胃を切った話はよそ新春の酒  
学のない母に生活の知恵を借り

### 虹川柳俱樂部(唐津市)新岡回天子報

石ころの丸みにながあひ過去がある  
ほんとうに求めるものをまだ知らず  
胃の薬大にも欲しい供日あけ  
汚れた手グラマン機は知っていた  
暖冬にもつけそねた店もある  
胃が悪いせに冷酒飲みたがり  
新顔にふと郷愁を知る酒場  
新顔が歓迎される虹川柳  
貧乏と言えぬ息子の育ちよう  
蒔かぬ種いつかすくすく花をつけ  
鼻息も甘いおりの乳さぐる  
入試迫る千々に乱れる親心  
風まかせ七ツの海を一人行く  
もう死んでよい年養老院で長生し

### 三井ヶ丘川柳会

高田博泉報

検査みな良かつたスリッパ履きかえる  
百やつつ鐘つき捨ててほのぼのと  
一言が失意の我をほのぼのと  
図星されてはのかに紅らむ嫁き遅れ  
八十の父の相手に酒を酌む  
ほのぼのと温い母子の頬が触れ  
十字架を胸に羊はまだ迷い  
春の音ジツと抱きしめる沈丁花  
貧乏神がほのぼの暮してる  
チルチルとミチルが好きな羊です

登 海 紅 桂 松 五 紫 勝 岩 義 久 笹 古 春 あ 掬 虹 回  
州 雨 緑 風 木 浪 一 光 美 仁 谷 吉 けみ 治 汀 天  
子

ほのぼのと葉ボタンに留守わびられる  
メルヘンの羊綿雲とあそぶ  
ほのぼのと昇る明日の陽を信じ  
ほのぼのと思ひ出してる風呂の中  
臨月は間近夫も動き出す  
予定日きつちりはのぼの明け初める  
ほのぼのと盲導犬を見送りぬ  
羊よ羊お前の年だ知ってるか  
退院の目にはのぼのと朝の雲  
臍まがりの羊で角を砥いでいる  
ほのぼのと運命線が開く年  
無邪気さえついつい抱きあけてしまふ  
晩鐘のバックに羊群と白雲と

### 大田川柳会

藤田軒太樓報

転ぶほど笑い止まらぬ娘と笑つ  
七転び八起にあせる五十坂  
艶文をとときめく胸でひと抱き  
起きあがり走ってから泣く男の子  
雪像は溶ける運命の艶を持ち  
艶事をさわがれた頃なつかしむ  
減反に減反銀の艶も落ち  
口紅の濃さが噂の種を播き  
七十五日噂まだまだ根が深い  
身に覚えなから笑って聞く噂  
格好の噂こたつの座が弾み  
したたかに酔って孤独を砕く夜  
ふと化粧して見る昼の老い独り  
風に聴く初恋の人まだ独り

恵美子 亜也子 野成 博泉 小路 恒明 あいき 眉水 柳宏子 凡九郎 古方 雀村 秀子 みのる 孝太郎 多賀子 水煙 立雲 三三男 早苗 軒太樓 耕草 虎秋 緑之助 独仙

▼二通報の時に規定をお読みください。

### 第三回・全日本川柳大会

日時 昭和54年6月24日(日)正午より  
会場 大阪市中央公会堂  
大阪市北区中之島一丁目一  
(地下鉄淀屋橋駅東へ)

### 宿題 第一部 事前投句

「天」 藤島 茶六選  
「地」 岸本 吟一選  
「人」 山田 良行選  
25cm×21cmの句箋に単記無記名  
題記入、出句封筒に住所姓号明  
記

### 第二部 当日出句 締切一時

「本」 橘高 薫風選  
「時事雑詠」 大森風来子選  
「みどり」 尾藤 三柳選  
「心」 去来川巨城選  
各部各題共二句「未発表に限る」  
川柳大賞・大会賞等

表彰 費 一、〇〇〇円(発表誌呈)

### 投句先

宿題第一部は投句と同時に送付  
宿題第二部のみは当日会場受付  
530 大阪市北区中之島3-6-32  
大ビル六〇八号 片山法律事務  
所内 全日本川柳大会係  
大会終了(五時予定)後開催  
会費三、〇〇〇円  
5月30日までにお申込み下さい

### 懇親宴

主催 日本川柳協会



# 募集

## 六月号発表 (4月15日締切)

川柳塔 (10句) 若本 多久志 選  
 水煙抄 (10句) 川村 好郎 選  
 愛染帖 (3句) 橘高 薫風 選  
 課題吟 (各題5句以内)  
 「低気圧」 岡田 拳法 選  
 「食中毒」 岩田 ひさを 選  
 「手直し」 田中 笑風 選  
 ★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

## 七月号発表 (5月15日締切)

川柳塔 (10句) 若本 多久志 選  
 水煙抄 (10句) 川村 好郎 選  
 愛染帖 (3句) 橘高 薫風 選  
 課題吟 (各題5句以内)  
 「織姫」 西山 幸 選  
 「ソーメン」 岡崎 祥月 選  
 「歯止め」 傍島 静馬 選  
 ★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。  
 ★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

常任理事会は4月5日 5時から

定価 四百円 (送料29円)  
 半年分 二千五百円 (送料共)  
 一年分 四千八百円 (送料共)  
 昭和五十四年三月二十五日印刷  
 昭和五十四年四月一日発行  
 大阪市南区鰻谷中之町二〇番地  
 編集兼 中島 蓬太郎  
 発行人 藤原 童心社  
 印刷所 藤原 童心社  
 郵便番号 542  
 大阪市南区鰻谷中之町二〇番地  
 発行所 川柳塔社  
 電話 大阪・二七一―三九八五番  
 振替口座 大阪・三三三六八番

# 本社四月句会

日時 四月六日(金) 午後六時  
 会場 金属会館  
 南区鰻谷東之町10番地  
 地下鉄堺筋線長堀橋下車東スグ  
 電話 271・3935番  
 柳話  
 兼題 「一年生」  
 「立ち食い」  
 「花便り」  
 「区切り」  
 席題 二題 当日発表  
 会費 三百円  
 ☆投句だけの方は切手百円封入  
 各題三句以内厳守  
 川村 好郎 (今月の出題・香川酔々)  
 宮尾 あいき 選  
 阿萬 萬的 選  
 若潮 花選  
 菊沢 小松園 選

★電話での投句や訂正はご遠慮願います  
 大阪市南区鰻谷中之町20

川柳塔社

5月の兼題 「旅」 「太っ腹」  
 「手ぶら」 「空論」

## 本社句会

5月7日(月) 6時から

6月7日(木) "

7月6日(金) "

8月7日(火) "

9月7日(金) "

10月7日(日) 二賞発表句会

## 常任理事会

4月5日(木) 5時から

5月4日(金) 5時から



## ・ペンペン草・

### 遊ぶ時間

★ぼくらのような仕事をしている者から遊ぶ時間を抜いてしまったら仕事は出来ない。遊び即仕事であるからだ。

★若い頃、映画の雑誌にいたが、四人で八・九種類の雑誌を出していた。しかし全員揃うことは月のうち四、五日間である。何か急用が出来る、何軒かのカフェーや喫茶店へ電話を入れるとスグ見つかった。

# カッケ 肉体疲労時の ビタミンB<sub>1</sub>補給に アリナミンA

☆筋肉痛・肩こり・腰痛・神経痛の緩和にも  
☆アリナミンA 25ミリ錠のほかに5ミリ錠



同じ雑誌社でも事務関係は午前何時から午後何時まではキッチンと執務していたが編集室だけは別世界だった。

「編集部はノラばかりだ」というけど、イザとなると発行日を競うマナコはらんらんとかがやくだ。だからこそ社長は、編集部員がノラノラしているも文句一つ云わなかつた。京都の活動

### ▼葉子コーナー

▼春本番の四月がスタート。タケノコを筆頭に山菜、野草が本来ならあふれる季節。昨今は一年中がしゅんのように店頭で顔をだしています。

▼ミツ葉、フキ、木の芽の香りと味が頂点に達するのがこの月。  
▼でも気温の変動が大きく変わるのもこの月の特徴です。

▼春風は朝に寒く、秋風は夕に寒し、と昔からいわれていま。気象の変化とともに風邪を引かないようにして下さいませ。

屋（映画関係者）が大阪へ遠征してくる。監督助手や撮影助手まで大阪の女は射落しやすいとみてか、青い灯や赤い灯へ、寄って来るわ、来るわ。道頓堀の女の園は京都の活動屋に蹂躪されっぱなしだったことをフト思ひだした。遊びは京都の人のほうがアカ抜けていたようである。

★十数年前、ラジオ大阪で歌謡番組の構成をさせてもらっていた頃、日本沈没の松本左京氏によくお目にかけた。氏は当時からSFの大家ではあったが、いっしょへ行ってもかならず氏の童顔がそこにあつた。いつも遊んでいるようにお見受けしたが、なかなかどうしてバリバリ仕事をされていたのである。

その二  
★今東光先生の「在世のころにうかがった話だが、ある日トイレから出て寒庭をじつと見てるうちに、小説の構想がぎゅぎゅと湧いてくるので、小一時間も縁側に佇んでおられると、奥さんが「早く坐つてくたさらないとおつやが冷えてしまいますよ」と。小説の世界から現実の食生活へ呼びも

★アタマの洗たくには、道頓堀より新世界へ行くほうが多い。  
「小走りでジャンジャン横丁通り抜け―潮花―のように、新世界付近は散逸されるが、ぼくはどうかというものが、あの街が好きだ。道頓堀を歩く、みんな金持ちに見えるが、ジャンジャン横丁を泳いでいると、ぼく自身が金持ちになつたような気になる。『動物園前地下鉄』を上がったところで宝くじを売っている。大抵の人が一枚か二枚買うのだから、ぼくは十枚買うの。ぼくが金持ちに見えるのはこの町だけである。」  
(不田二三夫)

大阪・神戸・京都・宝塚を  
最も便利に結ぶ

## 阪急電車



が多い。  
「小走りでジャンジャン横丁通り抜け―潮花―のように、新世界付近は散逸されるが、ぼくはどうかというものが、あの街が好きだ。道頓堀を歩く、みんな金持ちに見えるが、ジャンジャン横丁を泳いでいると、ぼく自身が金持ちになつたような気になる。『動物園前地下鉄』を上がったところで宝くじを売っている。大抵の人が一枚か二枚買うのだから、ぼくは十枚買うの。ぼくが金持ちに見えるのはこの町だけである。」  
(不田二三夫)

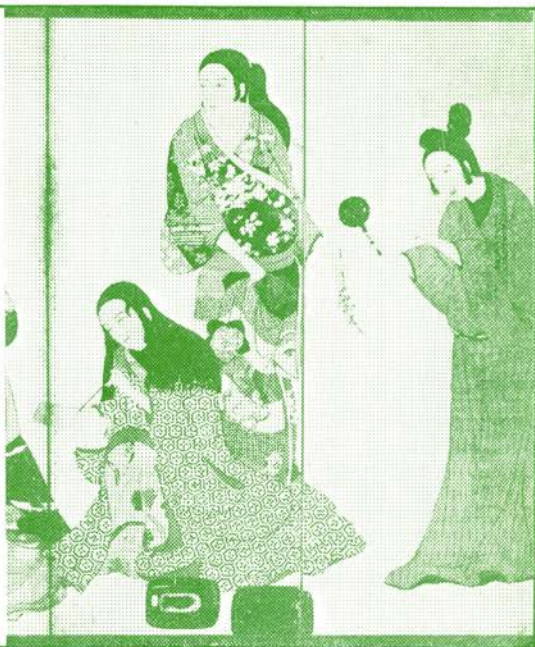
昭和四十四年十一月九日 第三種郵便物認可  
昭和五十四年三月二十五日印刷  
昭和五十四年四月一日発行(毎月一日発行)

# 美の殿堂 大和文華館

平城京をめぐる山々を一望の  
静かな環境にある大和文華館  
は 日本建築の特色に近代美  
を生かした美術の殿堂です  
収蔵品も日本・中国を中心に  
国宝・重要文化財を含む 有  
数のコレクションです  
観覧時間…10時～17時

▶近鉄奈良線 学園前駅すぐ

## 近鉄



宮内庁御用達  
菊正宗酒造株式会社  
神戸・灘・御影

一番よい酒  
うまい酒

清酒

# 菊正宗